329
164

始

329-164

小説

潮

佐藤紅緑著

28

潮

佐藤紅緑著

第一章

八月末の或日――。晴れ渡つた夏の日盛りの白い光りは、野山の緑にキラ〳〵と眩しく輝いて、此所宇都宮から日光に續く街道には、人通りの影も見えなかつた。ム

と熱とに相蒸熱れる草木の吐き出す温氣は四邊に滿ちて、蒸れるやうな暑さであ

折柄其所へ通りかゝつた、三人連れは、何れも此の邊では餘り見掛けられぬ都会

の令嬢姿であつた。隔てのない友達同志と見えて、さも親しさうに何事をか笑ひ

ながら、ヂリ〳〵と照り附ける日光を、僅かに翳したパラソルに除けて、ポク〳〵

空氣草履の足を運ぶ度に、灰のやうな塵埃は舞ひ揚がつて、白い足袋も黄色に汚れ

「文子さん、貴方お苦しくはなくて？」と、其の中の一番年上らしい二十一二のが、偶と思ひ附いたやうに振り返つて、丸く、冴え〳〵とした眼を見張つて聞いた。

パッと眼の覺めるやうな若葉色に、薔薇の花を共色で大きく刺繍に浮かしたパラソルの、棕櫚竹の根元は象牙に細く黃金の蔦を卷いた柄を、ダイヤに光る華奢な指に翳して、青味の勝つたお納戸の派手な透綾を着た年は十八九の文子と呼ばれたのは、「いいえ、ちつとも。――何うしてなの？」と、切れの好い二重瞼の眼元を、少し近眼かして、癖らしく皺めて聞き返した。

「だつて此の暑いのに――貴方などこんな山道をお歩きなすつたことないのでせう。」

「私だつて――、ありますとも！」と云つた文子の聲は、思はずはづんで居た。

「まあ、文子さんのお聲――。」と、可笑しさうにハンカチーフで口元を抑へて微笑んだが、

「どんな時？」と、聞き返した。

「そら修學旅行の時――鎌倉へも、函根へも歩いて行つたぢやありませんか。」と、文

子は眞面目である。

明石縮の單衣に、鼠色呂襦珍の丸帶を結んだ、二十歳ぐらゐな、面長な顏の少し下脹れな、眼の大きいのが、文子の其の顏を可笑しさうに見て、「此の道を、函根や鎌倉のと一緒だと思つてらしやるの。」と、口を挿んで微笑んだ。

「一緒だと思つては居ませんけれど、少しぐらゐ苦しくたつて今更引返されもしませんわ――それこそ又、三人で兄にどんなに冷かされますか。」

斯う云つて文子は、じと〳〵と氣味惡く膏汗の浮く顏を、鴇色のハンカチーフでそつと拭つた。強いローズの香が、熱した四邊の空氣に漂うて、噎るやうに鼻を襲ふ。

「そら御覽なさいな、矢張りお苦しいのでせう。」と、年上の女はコロ〳〵笑ふ。小鼻の邊にはポチ〳〵と露のやうな汗が浮いて、少し上氣せたやうに赤味を潮した柔らかな頰から、深く縊れた腮、襟元にかけて、しつとりと汗ばんだ肌は、處女でなくては見られないやうな、光りと、澤とを持つた。

文子は眞氣になつて、「それは、家に唯居るよりは幾らか苦しくつても――死ぬ程ぢ

やないわ。」と、終ひを投げるやうに云つて、故と睨めるやうな厳い眼付をして見せたが、知らず〳〵の中に眼尻からほぐれて來て、何時の間にか邪氣なく笑つて居る。

空には白熱のやうな光が輝き溢れて、地にはそよとの風も動かず、綠から綠に續く野から山には、キラ〳〵、キラ〳〵と白綠色の光りが眼を射るやうに燃え走つて、此の世はさながら空虛のやうな靜寂である。其の寂として靜かな眞晝の眩くやうな光りの中を、時々空に飛び交ふ小さな甲虫類の幽かな羽音が、何んとなく物侘びしい。——侘しいと云ふよりも寧ろ淋しい。

三人は其の淋しさに偶と魅せられるやうに口を噤んで、默々と歩み續けた。焦げるやうに乾き切つた道に照り返す光りと、道の兩側に蔽ひ被さるやうに繁つた青葉の蒸れる蒸熱と、それから吐き出す青臭い匂ひとは、むつと氣味惡く肌にまつはつて、汗は絞り出すやうに、ヂト〳〵と滲む。

「ほんとに貴方のお兄さんは、お口が惡いのね。——途中で意氣地なくなると、歸つてから屹度さん〳〵嘲はれてよ。」

斯う年上の令嬢は暫くして云つて、サラ〳〵とした洗髪の束髪の後れ毛がホロ〳〵とこぼれて、汗ばんだ頰に煩さく纏はるのを白い指に掻き上げた。

「それに出掛けに三人してあんな大口を利いたんですもの——尙ほ面目ないわ。」

「兄の相手になつて何か云ふと、ほんとに憎らしくなるのですもの。——お前など四里の道が歩かれたらお目にかゝる。今の女學生の達者なのは口ばかりだ——なんて途中で降參しちや、私達ばかりのことぢやない——新時代の婦人の體面にかゝるわ。」

「ホ、、、、文子さんの氣焰ね。」と、二人は聲を合せて笑つた。

人通りもなく、恰も一反の晒布を展べたやうに、畑を横切り、流れに添ひ、山際を縫ひ、林を潜つて、細くうね〳〵と續いた石道に、三人の派手な姿は、或時はくつ附き、或時は離れ、さながら縺れるやうに睦しく歩いて、時々は其の若々しい笑ひ聲も、靜かな四邊に響いた。夏の日射しを正面に受けた、若葉色、クリーム色、ピンク色の三つのパラソルは、花のやうに重り合つて、青葉の間を動いて行く。

三人とも虎の門女學校の出身で、文子と呼ばれたのは、今、實業界に於て若手の秀

才として嘱目されて居る、米津商會主、米津雄二郎の妹である。年上のは松坂時子今一人は中野芳子と云つて、此の三人は肉親の姉妹も唯ならぬ親友同志である。文は早くから両親に死別れて、今では唯一人の兄雄二郎があるだけだ。時子は母と二暮し、芳子は父と弟の三人暮しである。此の肉親の乏しい、頼り少い、心淋しい身上が、普通の友達以上に三人の間を親密に結び附けた、そして、人には聞かせられやうなこと、相談出來ぬやうな一身のことまでもお互ひに打ち開けて、頼りになつり、なられたりする仲である。

文子は毎年夏になると鹽原に避暑して楓川樓が定宿であつた。此の夏は仲の好い人を誘ひ合せて梅雨が上つて間もない七月の中旬から都會の暑さを其所に避けて、一う一ヶ月の餘になる。兄の雄二郎は仕事の暇を見ては、一日か二日泊りで、十日に一遍は必ず見舞ひに來てくれる。

宇都宮から歩いて日光まで行つて見たい、と、偶と物好きに文子が口を辷らしたのが元で、雄二郎の調戯半分の女學生攻撃となり、三人は意地になつて屹度歩いて行つ

て見せると力んで、今朝早く立つて西那須野から汽車で、宇都宮のステエーションを降りてから徒歩で此所まで來た。口では元氣なことを云つて我慢して居るやうなものの、一番年弱な上に孱弱い身體を持つた文子には、此の苦熱を犯して四里の山道を歩くと云ふことは、容易なことではなかつた。未だ一里も來ぬ中に、烈しい暑氣と、歩きつけぬ山道とに最う疲れ切つて、ぼうつとした顔色をして、動もすると遙か二人の後になつて、喘ぎながら追ひ附くのである。

話し〳〵行く中に、何時ともなく文子は又十四五間も遅れて了つた。

二人はそれに氣が附いて立ち止まり、パラソルを傾けて眩しさうに眼を細めて、此の孱弱い年下の友を勞はるやうに、眺め迎へるのであつた。トボ〳〵歩いて居た文子は眼を上げて、自分を迎へてくれる二人の眼と見合せて僅かに微笑んで見せたが、急に長い袂をヒラ〳〵と飜へして、汗を拭き〳〵急ぎ足に駆け出した。と、未だ十歩と歩かない中に、バツタリと前に倒れた。

「あら！」

待つて居た二人は思はず處女らしい驚きの聲を上げると同時に、馳け寄つた。

「文子さん、まあ何うなすつたの。」と、息急しく尋ねながら、兩方から助け起すのであつた。

轉んだ機勢に傘は飛び、柔らかな掌は土に汚れて、白い膚の薄い皮は處々破れて眞赤な血がブツ〳〵と滲んで居る。

それを見ると二人は尙ほ驚いて、「まあ、こんなにお怪我をなすつて——。どんなにか痛むでせう。」と、痛ましさうに眉を顰めて、時子は手早く懐紙を取り出すと傷口を拭つて、麻のハンカチーフで結へた。

「有難う。馳け出す拍子に石に躓いて、つい轉んぢまつて……。」と、痛みを忍ぶやうな、澁い笑顔を見せた。右の足の親指の爪先から血が流れて、白足袋を赤く染めて居る。

芳子はそれを眼敏く見附けて、「あら、足の親指からもこんなに血が出て——。」

時子もそれを見て、「生爪が起きたのぢやなくて？」

文子は二人にさう言はれて、初めて其所に痛みを感じた。そして、足袋を脱ぐと、柔らかな指も、貝のやうに美しく小さな爪も、べつとりと赤く染まつて居た。

「こんなに方々お怪我なすつて——どんなにか病めるでせう。」と、勞はり〳〵、二人は我がことのやうに手當てをした。

少し斜めに傾いた日脚は、ヂリ〳〵と焦げ附くやうに肩先に射し附けて、汗は止め度もなくタラ〳〵と、額から襟元、背に流れて、ベト〳〵と氣味が惡い。

「怪我などして、お兄さんに何と云つてお詫びしたら可いでせう。」と芳子は氣遣はしさうに云つた。

「それよりも今のところ何うしたら可いでせう。——車はなし、近くには家もない……。」と、時子は差し當つて其のことに當惑した。

文子は、自分故に困つて居る二人の顏を氣の毒さうに眺めて、「そんなでも無いんですから、歩けてよ。」と、氣强くは云つたけれども、傷の痛みと、疲れとに、是から三里の道は到底歩かれさうになかつた。

時子は可憐しいと云ふ眼色をして、「ちや、何卒か休茶屋まで辛抱して下さい。――其所で何んとかしませう。」

三人は靜かに歩き出した。日は容赦なくカン〳〵照り附ける。塵埃は舞ひ上る――三人の心には同じやうに、斯う云ふ無暴な企てを悔いる念があつた。特に文子は、暑さと疲れとに閉口して居るところへ、刺すやうな傷の痛みさへ加はつて、唇の色まで變り、少しく跛を引き〳〵二人の後にトボ〳〵と續いた。

やがて、其所から七八丁も歩いた頃、一團の杉の木立がこんもりと小暗く繁つた下に、一軒の休茶屋があつた。前は溪川の流れに臨んで、涼しい音を立てゝ居る清水の音も快かつた。石に激する其の飛沫は、恰かも狹霧のやうに三人の熱した肌を襲うて、蘇るやうな思ひをした。

「あの、一寸休まして頂きますよ。」

斯う年上の時子は言葉をかけて置いて、三人は古び媒けた床几に腰を掛けた。

「汚いところだが、緩くら休まつせえ。」外見も、飾りも一向構はぬと云ふやうな風を

した、六十近い主婦の婆さんは、素朴な調子で斯う云つて、煤けて眞黑になつた土瓶から澁茶を汲んで、すゝめた。

其所には先刻から腰を据ゑて、グビ〳〵酒を煽つて居る三人の男があつた。其の中でも見るから逞ましさうな腕をした、濃く、硬い髭は頬から腮を蔽うて、酒と、日に燒けた赤銅色の胸元には、獸のやうな荒い毛が生えた。大きな鼻や、厚い唇にも恐ろしい獸の力が滿ち溢れた、猛惡な人相をした親方らしいのが、酒に爛れて赤く血筋の張つた眼をギロ〳〵附かして、チラ〳〵と三人の樣子を覗つて居た。

涼しさうな流れの音は絶え間なく耳の邊りに響いて、梢の上に鳴き交す蟬の聲も聞えた。繁り交した杉の枝葉を洩れる日光は、さながら篩の目を通したやうに、冷々と濕つた黑い土の上に黄色い光りを落して、チラ〳〵と漂ふやうに動いて居る。

「お婆さん。此の邊に車はありませんでせうかね。」

時子は、曲突の下を燻して居る婆さんに聲をかけた。

「さあ――此所いら山道だで車はないだけど、駕籠ならあるだがね。」と、汚れて黑ず

んだ浴衣の袂で額の汗を拭きながら、締りのない口から、ノロ〳〵した調子で云ふ。

文子は、時子の心遣ひを察して、「私一人そんなものいゝわ。――歩かれるから。」

「何うして歩けるものですか――駕籠でも雇つて兎に角日光まで行くことにしませう。」

先刻から三人の樣子をヂロ〳〵眺めたり、其の言葉に耳を傾けて居た親方らしい男は、「貴方がた、どちらに參られるのです」と、存外優しい聲で言葉をかけた。

時子は氣味惡さうにチラと其の男の顏を見て、「日光まで參らうと思つて居ますのですけれど……。」

「駕籠がお入用なら、私の子分の野郎で恰度日光まで戻りですが、安く乘つて遣つておくんなせえ。」

時子は文子を顧みて、「ぢや恰度好いわ、貴方乘つて居らつしやいよ。」

「だつて、私は……」

時子は其の

貴方は其のお足で歩かうと思つて居らつしやるの。」

親分は二人の會話を聞いて、文子の足の親指に目を附けたが、「生爪が起きましたね馴れない山道ぢやそれが一番危い。之れから道は惡くなるばかりだし、失禮ですが其のお足ぢやとても歩けませんや。乘つて遣つておくんなさい――私の方でも空で戻るより助りと云ふものでさ。」

「ほんとにさうなさいよ。時子さんと私とは緩々參りますから。」

「失禮ですけれど――。ぢやさうして頂きませうか。」

文子は、二人に氣兼ねをするやうに云ふと、時子はそれを押し被せるやうに、「遠慮するものぢやないわ。――それよか、疵はひどく痛まなくつて？」

「えゝ、少し――。」

「日光へ着いたら直ぐ醫者に診て頂きなさいよ。疵病すると惡いから。」

葦簾の目を通して斜に射し込む日影は、文子の白い頰から、肩の邊にチラ〳〵と動いて居る。

「甲子造も、丑松も、お嬢さんが乘つておくんなさるさうだから、晩の酒代に有り附けたぜ。」

斯う親方らしいのは二人の子分を顧みて云つて、コップを傾けた。

「へえ、何うも有難う御座えます。」と、額の狹い、鼻柱のひしやげた、下司張つた顏にえへ〳〵笑ひをして、「ちや、直ぐから參りませうか。」

「え、直ぐにしませうね。」と、時子は云つたが、文子の頷くのを見て、「日光へ行つたら桝屋へ行くことになつてますから、其所へ着けて下さい。」

「桝屋で御座えますか。存じて居ります。——さあ、相棒、行くとしようかな。」と、コップの底に殘つて居た酒を舐めるやうに傾けると、汗と垢とに煮〆たやうな手拭を捩鉢卷にして立つた。

「さあお嬢さん、乘つておくんなせえ。」と、自分の前に置かれた不恰好な山駕籠に、文子は極り惡さうに乘つた。

「二人は後から緩くり行きますから、桝屋で待つて居て下さいね。」と、時子は駕籠に

寄り添ふやうにして、

「こんな物に乘つて、私何んだか變よ。」

「二十世紀の新婦人と、好いコントラストね。」

斯う時子が冗談のやうに云ふと、三人は顏を見合せて微笑んだ。

「どつこいしよ。」

肩を入れて腰を伸すと、駕籠はゆら〳〵と搖れて、二三歩歩き出した。

「ちや、お先きに失禮してよ。——早く來て下さいね、待つてますから。」

文子が顏を出して云ふと、二人は頷いて見せた。そして、暫く其所に立つて見送つて居たが、やがて、道の兩側から蔽ひかゝつた恰も青いトンネルのやうな雜木の青葉の蔭に、文子を乘せた駕籠は見えなくなつて了つた。

其二

夏の日もとつぷりと暮れて了つた。月のない晴れ切つた夜の蒼い空には、乳色の星

がチラ〳〵、チラ〳〵と瞬いて、此の頃から漸う濃くなり初めた天の川は、仄白く中天を横切つて一筋流れた。晝でさへ人通りの稀れな里道は、夕方野良歸りの村人が通つて了つた後は人の姿も全く杜絶えて、路傍の叢に鳴き頻る蟲の聲のみが、獨り降るやうに繁かつた。

其所へ、忍びやかに――しかし取急いだやうな樣子で通りかゝつたのは、晝間文子を載せた山駕籠で、地に鳴く蟲の聲の外は穴の中のやうにひつそりとした夜の野中の一筋道を急ぐ呼吸が物慌たゞしく、啻ならぬ氣な氣勢であつた。親分らしい巨漢も、駕籠の先に立つて居た。

やがて、遙か向ふに、チラ、チラと、燈火らしい光りが見えると、前に立つた親分は振り返つて、「オイ、來たよ。――最う一息だ。」と、聲を忍ばせて囁いた。

それは、恰も除けものにされたやうに、村の家々の軒並とは遠く離れた野の中に、唯一軒建てられた粗末な茅葺の家の窓を洩る燈であつた。之れでも人が棲むかと思はれるぐらゐ荒れるに任して、荒土塗の壁は幾年の風雨に處々剝げ落ちて、枳殼の生

垣は何年にも刈込みをしたことがないのか、延び放題に延び蔓つた。

其の前まで來ると、三人の足はぴたと止つて、駕籠は地に下された。

「お前達は此處で待つて居れ。」と、親分はヅカ〳〵と戸口まで行つた。

「御免な。」

けれども中はひつそりとして、返事はなかつた。

「オイ御免よ。――最う寢たのか。」と、稍〻強く再び呼ぶと、中からは初めて氣が附いたものゝやうに、「誰方？」と、皺嗄れた聲である。

「俺だ――野々山の岩五郎だよ。」

「あ、岩五郎さんか――今開けます。」

暫くモジ〳〵して居たが、やがて立附の惡い重い戸は、内から開かれた。

「まあお入んなさい。」と迎へたのは、年は五十六七、最う六十にも近い爺であつた。薄く禿げた髪は半ば白髪して、其の赭黑い肌の色にも、廣い、四角な額に深く刻まれた皺にも、長い間の勞苦を嘗め盡したと云ふやうな、辛酸の多い生活を忍んで來たこ

とが覗はれる。

「どうも遅く來て濟まんな。」と、岩五郎は鋭い眼を光らして、四邊の樣を伺つた。一間しかない家の中には何一つない。天井もない家根裏は眞黑に煤けて、古びて擦れ切つた疊には處々大きな汚點が浮いた。其の空家のやうにガランと荒れた中に、小形の金庫がカンテラの薄明りに不相應に目立つて見えた。

「時にお前さん。」と、冷たい、沈んだ、しかし乍ら鋭い眼色で岩五郎を見て、「五十圓の口の期限が最う切れて居ますよ。あの方は何うして下さるんだな。」

岩五郎は手を振つて見せて、「爺さん、それどころぢやない。今晩是非とも一つ無理を聞いて貰はにやならないんで。——あの方は二三日中に片を附けるから。」と、笑顔を見せた。

「お前さんは義理が堅いから、あの分はまあ二三日待つとしませうが、——一體幾ら入るんです。」

「是非とも之れだけ欲しいんで……。」と、二本の指を示した。

「二十兩か？」

岩五郎は頭を振つて、「二百兩。——今晩何うしても二百兩なくちや、岩五郎の顏が廢るんだ。」

「何、二百兩？ 抵當無しでか。」

「吃驚しなさんな。抵當も抵當、素晴らしい抵當があるんで——二百兩ぢや安過ぎる代物だ。」

「まあ其の代物を見た上でなくちや、決められませんや。」

「おつと承知だ。」と、頷いたが、戸口の方に向つて、

「おい甲子造、其の代物を連れて來い。」と、怒鳴つた。

子分の甲子造は、力なく打萎れた一人の令孃を、引立てるやうにして入つて來極度の恐怖と、心身の疲勞とに白蠟のやうに蒼醒めた顏には、亂れた束髮の後れパラリとこぼれて、涙の乾いた二重瞼の眼は少し險を持つたのが仄暗い燈火を浴茫然と立つた姿は、怖ろしい程淒艶であつた。

爺は呆氣に取られて、唯、まち〳〵と其の容貌から衣裳などを見詰めて居た。

「よし〳〵、御苦勞であつた。お前は歸れ。」と云つて置いて、「爺さん、抵當てのは之れで。」と、ブル〳〵顫へて居る若い女を腮で示した。

「何、之れが抵當？」

「之れは私の妹ですが、東京の或華族の小間遣に遣つてあつたのが、昨日歸つて來たんで——中々兄貴思ひの奴で今晩私が二百兩の金に困つて居るのを見兼ねて、兄さんの爲めならどんな苦勞も厭はぬと云ふので、斯うして連れて來たんです。」

「お前さんの妹にしては、中々美しいね。」

「いゝえ、私は決してそんな者では……」と言ひかけるのを、岩五郎は皆まで言はせず悽い眼で睨み附けて、

「お前は默つてろ。——爺さん、此奴は今迄で抵當になつたことがないので、恥しがつて居ます。」

「そんなに無暗に抵當にされては、堪るものぢやない。」と、獨言のやうに言つて、

「此のお女中がお前さんの妹であらうが、無からうが、そんなことは私の方でいつ構はんが、此の抵當では御免蒙りませう。」

岩五郎の眼はギロリと光つて、「此の抵當では何故可けないのだ。」と、膝をヂリ進めた。

「品物なら兎も角、人間の抵當では飯を食ふからの。」

「それは當り前でさ——、飯を食はなけりや死んで了ふ。」

「飯を食ふとすると、利息は其の方に引けて了うて。」

「だが——自分の妹を褒めるのぢやないが、其の代り抵當流れになつたつて、女郎にでも藝者にでも、三百や五百には賣れまさあね。——お前さんの細君さんにしたつて好いや。」と、ニヤリと新嬢の顏を眄に見た。

爺は眞面目なもので、「私は女房は要らない。又、人間を賣ると云ふことは好まんて。——兎も角、飯を食ふものは猫でも御免蒙る。」

「おや爺さん、何うしても可けないのかね。」と、聲が高くなつて、其の悽く光つた眼

に、屹と相手の面を見た。

「可けない。」と、キッパリ斷つたが、偶と氣が附いて、「しかし、待てよ。」と、恰かも狼の前に在る小羊のやうに顫へて居る文子の頭の物から、着物、帶、指環などつくづくと眺めて、「此の衣裳と、道具だけなら抵當に取らう。」

「それで幾ら貸してくれる。」

「さうだな——百兩が一ばいだ。百兩持つて中味だけ連れてお歸り。」

「裸の女を連れて歩くわけには行かん。——ぢやまあそれで可いとして、百兩だけ借りて行くことにしよう。しかし、妹は今と云つても私は外へ出らなけやならんから、明日連れに來ることにして、今晩だけ預つといて貰はう。」

「そんなら今晩だけは預るが、此の儘放つとかれるやうなことがあつては困る。——飯を食ふからな、成る可くは朝飯前に連れに來て貰ひたいの。」

「爺さん、心配しなくつたつて大事な代物だ。屹度連れに來るよ。」と、岩五郎は笑つて見せた。

「ぢや、百圓だけ貸すことにしよう。」と、爺が立つて金庫の扉を開いて、紙幣の勘定を始めるのを、岩五郎は伸び上るやうにして覗いて見た。

「有るところには有るものだな。」と、思はず獨言つた。

「なあに、そんなに有りはしないよ。」と、手早く紙幣を隠して、打消した。そして十圓札を十枚岩五郎に渡して、

「それでは百兩——。明日の朝此の女中を連れに來ることを忘れんやうにな。」

「念には及ばんよ。」と、紙幣を改めながら云つて、「確に百圓ある。又、明日來ることにしよう。」

札を内懐に納めると、そこ〳〵に外へ出た。

天候が變つて、雨を催した空は墨のやうに曇つて、星の光りさへ一つ見えぬ闇つた。面を深く手拭に包んで、先刻からそつと内の樣子を覗つて居た男があつた岩五郎が外へ出ると、すつと消えるやうに垣根の山吹の蔭へ身を潜めた。そんなには少しも氣が附かない岩五郎の足音が、次第に闇の中に遠くなつて、果ては消

了ふと男は又そつと戸口に忍び寄つて、息を殺して家の中を覗ふのであつた。

家の中の爺は、そんなことゝは夢にも知らない。——逃げ出す氣力もなく、唯、極度の怖れに戰いて居る女の容貌から、姿をつく〴〵と眺めて、「お前さんは岩五郎の妹ではあるまい。——大方誘拐されてお出でなすつたんだらうな。」

女の疲れた頭には、今日一日のことがさながら遠い昔のやうに思へてならない。足を痛めて、駕籠に乘ると、それが思ひがけもなく此の附近を荒す惡漢で、到頭こんな處へ連れて來られて了つた。小說や、物語なら兎も角、現在自分の身に振りかゝつた災難でありながら、今の世に斯う云ふことが有り得よう筈がない。何となく夢を見て居るやうな氣持だ。けれども、日光の桝屋で待つて居る友達のこと、兄のことを思ふと、一刻も斯うして居られない。

彼の女は、力なく頂垂れて居た蒼醒めた顏を上げて、「私は、あんな人の妹ではありません。——米津文子と云ふ東京の者ですから。どうか私を歸して下さい。」

「お前さんを歸すことはならんて。其の着物と道具とは百兩の抵當に取つたのだから

な。」

「百圓ぐらゐのお金、歸してさへ下されば直ぐにもお返し申します。——どうぞ助けて下さい。」

束髮の根元が緩んで頰さく頰にこぼれる後毛を拂はうともせず、憐みを乞ふやうな眼色に、凝乎と爺の面を見た。

「さうは行かん……」

爺は頑固に其の薄禿の頭を振つて、何事をか言はうとする途端、戸口で一發、烈しいピストルの音が轟くと共に、異樣な悲鳴を上げて、爺の身體は仰向けに倒れた。

其所へ先刻から樣子を忍び覗つて居た男が入つて來て、土足の儘床の上にのつそりと立つた。仄白く照らしたカンテラの光りに見ると、古びた豆絞りの手拭で面を深く包んだ間から、一癖有り氣な眼が光つて、紺の盲目縞の筒袖の、尻を端折つて居た。

そして、氣絕して倒れて居る文子には眼もくれず、左の脾腹を抑へて呻き苦んで居る爺の胸元を目がけて、更に一發見舞はうとした。

「暫く待つてくれ。」と、左の手を上げて起き直つて、視力の鈍り行く眼に凝乎と男の顔を見据ゑたが、

「人里を離れた野中の一軒屋だ。聞く者もなけれや、見る者もない。炎所を打たれた此の私は、どうせ助からない命だ。手向ひもせぬ、又、救けも呼ばない。しかし、今生の際に頼みがあるが、悪黨にも情があるなら、私の云ふことを聞いてくれ。」斯う云つて吻と太く一息吐いた。

男はピストルを構へたまゝ、油斷なく注視して、「俺に頼みがある——次第に由つちや聞かぬこともないが、一體どんな頼みだ。」

「お前は、私に何か怨みがあるのか。」

「いや、怨みはない。」

「そんなら、何んの爲めに私を殺すのだ。」

「金が欲しいから——其の金庫の中に呻つて居る金が欲しいから。」

「矢張り金が欲しさの強盗か。」と、苦しさうに太息を吐いたが、男の頷くのを見

て、

「さうか——人を殺してまでも金が欲しいのか。人の命を取らんでも金は幾らも儲かるのに、未だ先の長い盛りの男が、金の爲めに罪を犯して一生重罪人として日蔭に埋れて了ふとは、何と云ふ情けないことだ。」と、つく〴〵嘆息して、「どうせ私は、最う一時間とは生きて居られない。斯うなれば私が二十年の間食ふ物も食はずに貯めた、其の金庫の中にある五萬圓の金は、皆お前の自由だ。好きな通りに出來るのだ。しかし、お前も人間なら私の云ふことを聞いてくれ。お前だつて親のある身だらう、其の親が、若しお前が人殺をしたことを知つたら、どんなに落膽し、どんなに嘆くか——其の有樣が眼に見えるやうだ。人の親となれば、子を思ふ心は皆同じものだ。私は、人殺の子を持つたお前の親が可哀さうでならない。」と、喉に粘る唾をコクリと呑み込んだ。男は靜かに耳を傾けて居た。

爺は又言葉を續けて、「實は私には一人の子息があるが、今から二十年前、私の妻が私を見棄てゝ其の時三歳の倅を連れた儘、姦夫と一緒に行方を晦まして了つた。そ

れから私は此の世が厭になり、世間の人間が憎くなり、人を苦しめることが此の上もなく樂みになつて、人の厭ひ嫌ふ高利貸を始めた。棄てゝ逃げた女房は憎くても子は可愛い。母の心は腐つた奴であらうとも、子に何んの罪があらう。金錢のことにかけては鬼のやうな高利貸にも、親子の情はある。世間からは犬猫のやうに嘲られ、人鬼のやうに憎まれながら、一日々々と溜めた金は、決して自分の爲めではない。何時歸るか分らない可愛い其の一人の伜に殘さうと思へばこそだ。親の心子知らずで、今では伜は何處にどうして居るか知らんが、姿は見ずとも、聲は聞かずとも、可愛いと思ふ心に變りはない。自分の子が可愛いから、同じやうにお前も可愛いし、又、親御も氣の毒だ。强ひては言はんが、心があるなら五萬圓の半分を私の伜に分けて遣つてくれ。厭だと云ふならそれまでの事だが、私はお前を男と見て死際に頼む。――泥棒だから頼むのだ。生中善人らしい顏をして居る世間の奴等より、私は泥棒の方が頼母しい。金庫の中にある五萬圓は、今の私の財産の全部だ。それを一厘一毛も隱さずにお前に渡すのだ。半分だけ伜に渡してくれると、くれぬとは、お前の心一つにある。厭

であつたら渡さんでも好い。どちらにしても今此所で、私がお前の手にかゝつて死ぬのも何かの因緣だ。どうか本心に立ち歸つて、其の金を資本に正しい仕事を始めてくれ。」と、其の眼よりは熱い涙がハラ〳〵と滾れて、次第に蒼醒めて行く頰に傳ふ。

「あゝ、私は最う死ぬ。――私が死んだら强慾な高利貸が一人減るばかりで、世間の爲めには好い厄介拂ひだ。しかし、此の儘で死んだら他殺の嫌疑で、自然お前に手が廻る。敵ではあるものゝ、自分の伜のことを考へれば、お前を罪人にするに忍びない、さあ、其の短銃を私に渡して、金を持つて夜の明けない中に早く逃げなさい。――後は火をつけて燒いてくれ。」

さう云ふ中にも呼吸は次第に急はしくなつて、聲も喉にからみ、言葉も縺れて來た。

誠心の籠つた其の言葉と、涙とは、男の胸を强く衝いた。今迄默念と聞いて居たが、此の時冠つた手拭を取ると、倒れるやうに爺の前に兩手を突いた。そして、心から溢れる感激に聲も顫へて、「あゝ惡かつた。長い間の夢から始めて醒めた。親が子を

想ふ心はそれ程深いものとは知らなんだ。私は初めて胸まで浸み通る人間の聲を聞きました。今日の今から心を改めて、屹度正しい人間の道に歸ります。」と、其の双の眼よりは、熱い涙がホロ〳〵と滾れて、疊の上に落ちた。

「それにしても强盗と知りながら飽くまで私を信用して、それ程の大事を賴むとは——御老人、私も男だ。たとへ地を潛つても子息さんに廻り合ひ、五萬圓は必ずお渡し申します。」

其の言葉を聞いた爺の視力の鈍る眼からも、熱い涙は止め度もなく湧いた。

「それを聞いて私も安心した。一人の人間の心を善道に歸らせたと思ふと、死んで行く身にも嬉しい。——金は半分はお前のものだ。未だ若い身だ、それで何うか正業について、親を安心さしてくれ。」と、首は力なく項垂れる。

「許して下さい。初めて眞人間の心になることが出來た。」

「早く行け。——其所にある證文も私の死骸と一緒に火葬にしてくれ。」と、呼吸は次第に弱くなつて來た。

「御老人——。」と、氣が遠くなるやうに、恍とりとした眼色になつて行く爺の耳元に口を寄せて、「貴方と、そして子息さんの名は？」

「私の名は桑村新藏、倅は新一——詳しく遺言狀に書いてある。」

「分りました。其の子息さんに會ふまでは、私の命を、私が預かりました。」

血の氣の失せた爺の面の色には、仄暗い燈火の光りが流れて、土のやうに見えた。そして、力なく閉ぢられて行く瞼をかすかに開いて、「分つたか、早く行け。」

斯う云つた爺の身體は、最う支へる氣力もなく其所へバッタリと倒れて、息は絶えた。

男は其の死顏をつく〳〵と見て、「あゝ、惡いことをした。世間では高利貸の何んのと惡く云ふけれども、こんな立派な人間もある。」と、眞實悔悟の聲を洩らした。其の眼から溢れ落ちる潛々たる熱涙は、頰を傳ひ、腮に流れて、爺の冷たい顏の上に滾れた。彼の心には、五年前國を出奔して故郷に殘した年取つた一人の父親のこと、妹のこと、弟のことがまざ〳〵と浮んで居た。

やがて、「斯うして居る場合でない。」と、金庫の金を纏めてしつかり懷中すると庭にあつた石油鑵から石油を座敷一ぱいに撒いて、火を點けた。バッと燃え立つ眞紅の焰は、障子に移り、家根に傳ひ、炎々と燃え廣がつて爺の死骸は、紅蓮の焰に包まれた。ちつと其の樣を眺めて居た男の顏は焰に映じて、血のやうに赤い。

彼は、氣を失つて死んだやうに倒れて居る文子を抱くと共に、裏口の戸を蹴破つて飛鳥の如く外へ出た。と、暗の中から、ぬつと現はれて、「オイ、待て——奴ばかり甘い仕事をしようたつてさうは行かねえや。」

斯う悽文句で呼び止めて、今しもひた走りに驅け出さうとする前へ立塞つた大男があつた。——それは先刻歸つた筈の岩五郎の聲であつた。

男はギクリと一歩退いて、折しもバッと燃え上つた焰の光りに、岩五郎の姿をチロリと見たが、ニヤリと笑つて其の儘通り過ぎようとした。

「ヤイ、人が聲をかけるのに默つて行く奴があるか。——其の懷の五萬圓を此方に寄來してから通れ。」と、腕を押へた。

「何をする！」と云ふ聲と共に、岩五郎の大きな身體は毬の如く大地に倒された。

「奴！　何をしやがる！」と、强か打つた腰骨を擦つて起き上つた時には、文子を抱いた男の姿は、敏捷に、大きな闇の中に行方も知れず呑まれて居た。

炎々と燃え上つた凄まじい焰は、漆を塗り潰したやうな眞黑い空を赤く焦がして、血のやうに赤い其の色は、四邊の草や木の青葉にギラ〳〵と物悽く流れた。

第二章

「若し、一寸ものをお尋ねいたしますが——。」

道端の百姓家の入口に立つて、斯う聞いた。眼の凉しい、鼻筋の通つた、眉の濃キリ〻と引緊つた色の白い顏の半面が、傾げた洋傘の下に見える。

軒先には三四羽の鷄が、見すぼらしく雨に羽を濡らして、ク、ク、と鳴き交しながら、ビショ〳〵餌を漁つて居た。

と、奥の方で消魂ましく泣く赤兒の聲がして、それを宥め賺すやうな氣勢がしたが、暫くすると寂りと靜まつて了つた。やがて其の家の細君らしい女が、はだかつた胸元を掻き合せながら、大儀さうな身體つきをしてノッ〳〵と出て來た。

「何んだな？」と、少し脹れぼつたいやうな顏は愛想氣も無く云つて、ジロ〳〵青年の顏を眺めるのであつた。

外に立つた青年は丁寧に會釋をした。

「此の邊に桑村と云ふ家を御存知ありませんでせうか——名前は新藏と申します。」

「あ、あの高利貸の——。」と、如何にも蔑視んだやうな言ひ方である。

「え？」と、青年は、自分の耳を疑ふやうに聞き返した。

細君は其の顏を怪訝さうに眺めて、「貴方は、桑村さんの何だかね。」

「いゝえ、何に——」と、理由もないのに口籠つて、「一寸知り合ひの者なんですが、此の邊を通つたものですから、それで訪ねるのです。」

「さうだか。」と、頷いて、「桑村さんの家は此處から六七丁先であつたゝかね、一昨夜

の晩火事が出て、燒けて了つたに。」

「え、火事が出たんですつて？」

「そして、何處かへ移轉たんでせうか。」と、稍急き込んで聞いた。

「それがね、貴方。」と、聲を潜めて、「家ばかりぢやない、燒跡から黑焦になつた死骸が出たゝがね。——人の噂では、何んでもそれが家に火を附けて置いて、覺悟を打つた自殺をしたらしいちゆんで——短銃を脇腹のとこへ當てゝ居たゝちうがな。」

青年の顏色は、見る〳〵眞蒼に變つて、暫くは言葉もなかつた。

「それは本當なんですか。」と、思はず聲が喘んだ。烈しい驚きの中にも、半ば疑ふやうな調子で聞いた。

青年が幾分疑ふらしい言葉付に、細君は少し躍氣となつて、

「嘘つちゆことがあるものだかね。行つて見れば分るこんだ。何しろ一人暮しのとこへ不斷から村の人に强慾だ〳〵と憎まれて居たでな、そんな慘酷らしい死樣をしても、はあ好い氣味だぐらゐで、誰も面倒見る者がねえだ。それでもな、到頭役場の厄介に

なつて、死骸の後片附は濟んたゞがな。」

それを聽く青年の心は苦しかつた。其の一言々々は、恰かも自分の身を責めて鞭打つ鞭の痛さを以て、彼の心に迫つた。

其所に立つて居る青年を、現在の子とは夢にも知らない細君は、未だ何か喋らうとするのを抑へるやうに、

「さうですか。——いや、何うも有難う御座いました。」と、慌てゝ云つて忙しく踵を返した。細々と降り注ぐ雨を洋傘に除けながら、遁れるやうに足早やに其所を去つて、ほつと一息吐いた。

未だ見ぬ親——三歳の時に別れたと云ふ母の言葉で、父に對する記憶は彼の心に朧ろにも殘つて居なかつた——に會はうと云ふ一心で、此處までは尋ねて來た。けれども、其の望も今はすつかり破れて了つた。

「今二三日早かつたら——。」と、悔んでも及ばなかつた。歩く元氣も失せ果てゝ、知らず〳〵の中に足は何時の間にか自然と立止まつて了つて、道端の草の葉に注ぐ細

い雨脚を、思ひ詰めたやうな眼付をして、凝乎と眺めて居るのであつた。

「兎に角、燒跡まで行つて見よう。」

斯う呟いて、吸ひ附いたやうに止まつて居た足を、再び懶るさうに運んだ。

燒け壞れた石、黑く燃え殘つた柱の折など、取り止めもなく灰の中に散らばつて居た。見るから慘澹たる有樣の燒跡には、秋に近い夏の雨脚が細々と降ちて、一層の哀さを添へた。四邊の木や草の葉は茶色に燒け縮れて、片側の枯れたやうに葉の焦げた樫の木には、ヂイ、ヂイと、息詰まるやうな重苦しい蟬の聲が時々聞えた。

其處に立つたのは先の青年であつた。——新藏が夢の間も忘れることの出來なかつた、其の子の爲めに人の憎みと、怨みとを一身に受けて、五萬圓の財産を殘した、三歳の時に姦婦たる母に連れられて行方不明になつた、彼の一子新一であつた——あれ程までに思ひ詰めて、愛着の糸を心から切り離すことの出來なかつた其の子は、今眞

實の父を訪ねて、父の家――父の死場所に立つて居るではないか。けれども、それが今となつては何んにならう。新藏の身體も、魂も、最う此の世のものではない。

二十年の長い間――死ぬ迄も父の起臥した處と思へば、何物も皆一種の懷しさを以て新一の眼に映じた。傷ましい燒跡ながら、其處に立つて凝乎と眺めて居ると、彼の心には、父に對するさま〳〵な心が、生き〳〵と鮮かに動いて來るのであつた。

兩親の間のことは、今に至るまで新一に取つては一つの疑問である。解き難い謎である。何故別れて暮さねばならなかつたか、何故音信まで絶つて了はねばならなかつたか――。

物心のついた時分には、新一は母一人の手に育てられる淋しい子であつた。其の姓も母方の和田を名乘つて、素より眞實の父が此の世に在るなどゝは夢にも知らなかつた。それが去年の秋の末の或夜、母が臨終の細い息の下の物語で、自分には三歳の時わけあつて別れた、桑村新藏と云ふ眞實の父のあることを知つた。

何故別れたのか？　其のわけを尋ねると、母は病み衰へて落ち窪んだ鈍い目に、涙を一ぱい溜めて、

「どうぞそれ丈は聞かないでおくれ。」と、孱細い聲で哀願するやうに云つた。其の憐れげな有樣を眺めては、瀕死の病人が一生懸命に獅嚙み附いて居る祕密を、奪はうとするやうな慘酷さを感じて、强ひて問ひ詰める力もなかつた。一面には打ち明けられた時を怖れる不安もあつた。

「何かある。屹度不詳なことがあるのだ。」

と、母が亡くなつて後も、動もすると頭は兩親の間の解し難い關係に向つて注がれて、心が暗くなつて行くのが常であつた。そして、其の事に頭が向くと何時でも、自分が知つてはならない祕密を犯して行く恐ろしい罪人のやうな氣がして、出來るだけ抑へ紛らさうとして來た。抑へ紛らさうとすればする程、疑問は愈々强く、益々鋭く迫つて來て、果ては我ながら身慄ひするやうな憎む可き斷案を兩親の間に下す。

「それが事實であつたら何うしよう。事實であつたら――。」と、思はず戰慄する。

遂に新一の心には、其の疑惑が事實の權威を以て迫つて來るやうになつた。幼い

時からの淋しい氣持は愈々淋しくなり、沈欝な性質は益々沈欝になつた。未だ生きて居ると云ふ生みの父の名まで聞いては、飛んでも行つて一刻も早く會ひたい。けれども兩親の間の關係に思ひ及ぶと、今更父を訪ねて名乘り合ふと云ふことが、空恐ろしくもある。會つた結果、自分の疑惑が萬一事實として證明されるやうなことがあつたら――優しかつた母、自分を愛してくれた母、其の母を仇敵として憎まねばならぬやうな呪はしい身の上であつたなら、自分はとても世の中に生きては居られない。――――一生會ふまいと決心した。

けれども亦、一切を忘れて唯會ひ度さに矢も楯も堪らなくなつて來る。會はうか、會ふまいか――此の相異つた二つの心の格闘に、恰も火と水と相鬩ぐやうな苦しい日を、去年の秋から續けた。

父を慕ふ其の子の眞實な心――それは、恐ろしい危惧と不安とに打克つて、彼の身體を到頭此處まで連れて來た。そして、父は僅か三日の違ひで、既に形も止めぬ灰となつて了つた。若し父が無事で居たなら、或は其の口から兩親の間に抱いた疑問を解く鍵を與へられたかも知れない。――けれども、祕密は祕密として永久に葬られ、謎は謎として彼の胸に永へに殘された。

「それにしても、何故父は自殺などしたらう。」之れも解くことの出來ない大きな一つの疑問であつた。

さう云ふ慘めな死を遂げても好い氣味に思はれる位、生前人々から憎み怨まれて居たと云ふ。永い間を獨身で辛抱して高利貸までして居たのなれば、幾らかの遺産はありさうなものだ。それは何うなつたか――。或は、他殺を、自殺のやうに見せかけたのではあるまいか――そんな事がないとも限らない。

直ぐにも村の人々に聞き合せて見たいとも思つた。けれども先刻の細君の口振りでは、どうやら父は四面楚歌の間に暮して居たらしい。今更自分が子と名乘つて、尋ねて見て何にしよう。却つて父に對する讒謗の聲を聞いて、不快な思ひを忍ばねばならぬくらゐなものだ。何うしたところで死んだ者は再び生きない。母が臨終に言はなかつたものとして、自分には父はないものと思つて居た以前のやうな心持で暮さう。

愁ひに聞いたればこそ、さまざまな疑惑に心も苦めた。遂には會ひに訪ねてまで來た。來て見れば此の始末――何事も夢だ。今迄のことは一場の夢であつた。

斯う思ひ諦めた。

「それにしても儚い親子の縁であつた。」

黒い灰を打つ柔かな雨の音が、ピショ〳〵と聞えて、淋しく胸に沁みる。雨に濡れた野山の緑は咽せるやうな、濃い鮮かな色を見せて、低く立迷ふ靄立つた白い雨雲が、山の襞々を輕く動いて居た。

新一の眼には自然と涙が浮んで來た。と、嘗て呼んだ味を知らない言葉を、此の時偶と呼んで見たいやうな、懐しいやうな、物淋しい心持になつて、

「お父さん。」と、極めて小聲に呼んで見た。

其の聲が自分の耳に響くと、わけもなく涙は新しく湧いて來て、抑へ切れない熱いやつが、止め度もなく瞼を押して、ホロ〳〵と頬を傳つた。

此の時、人通りも稀れな前の小道に、ピショ〳〵と幽かな足音がしたので、

「犬か知ら？」　かう思つて振り返つて見た。簑笠を着た十五六の小娘が、淺葱無地の繼接した單衣の裾を端折つて、赤い腰卷を見せた。脛から下は空脚にして、素足でピチャ〳〵歩いて來た。そして、笠の下からクリ〳〵した栗鼠のやうな眼を光らせて、見馴れぬ新一の姿を訝しさうに、チロ〳〵と見い〳〵行つた。

新一は我にもなくぽつと顔を赤めた。そして、涙を拭くと思ひ切つて元來た道へすた〳〵と引返した。！

其の後姿が雨に煙つて、肩のあたりが淋しく見えた。

第三章

新一は三田の理財科を昨年の夏優等で卒業して、年々賣口に困る卒業生の中にも、成績が好いのと、將來有望な秀才と云ふ評判とで、何會社とか、何銀行とかゝら隨分見込みのある口が掛つて來た。けれども何か深く考へるところがあるものゝやうに、

それを皆斥けて、母と共に貧しく持つて居た東京の世帶を疊んで、少しの傳手を求めて飄然として鹽原の山中に隱れた。そして、東都の知己とは一切音信も絶つて、其處の小さな小學校の一敎員として、古ぼけた紺メルトンの詰襟の肩のあたりがチョークの埃に白くなつたのも構はず、毎日腰辨當でテク〳〵と通つて、無邪氣な小兒を相手に其日々々を送つた。

如何なることを期して此の擧に出でたものか、彼は、一切口を緘して語らねば、其の理由を知る者は一人もなかつた。唯、村の人々からは穩良親切な良敎師として迎へられ、生徒からは恰かも慈父の如く懷かれて、衆望を其の一身に集めて居た。

母が亡くなつてからは不自由な男世帶を疊んで、今では土地の人の家の一室を借りて、外見では暢氣らしい日を送つて居る。此の夏の暑中休暇を利用して、父を訪ねて其の最後が解つてからは、毎日一室に閉ぢ籠つて、何を思ひ、何を考へるのか、快々として打ち沈んだ日を送つて居たが、授業始めの今日はそれでも急に生命を吹き込まれたやうに元氣附いて、常になくいそ〳〵と出掛けて行つた。

學校に行くと、家に居る時とは全で別人のやうに變つて、幼い、無邪氣な生徒どもに、「先生、先生。」と。賛られるのを煩さうにもせず、其の何事かを深く思ひ惱むらしく、暗く曇つた顏にも、優しい心からの笑みをニコ〳〵と浮べて親切に面倒を見る。

今日は始業式のことゝて、簡單な式のもとに、生徒の唱歌、校長の訓示などだけで學校は退けた。外の敎員たちは午前に事務を片附けて、さつさと歸つて行つたが、新一のみは一人殘つてテエブルに向つて、何彼と整理をして居た。

やがて、時計の二時を打つのを聞くと、持つて居た筆を措いて、

「あゝ、最う二時か……。」と、少し後ろに反つて欠伸をした。そして、兩手を後頭に支つて、開け放つた窓から廣いグラウンドに眼を遣つた。門の傍に二三人の生徒が蹲まつて遊んで居る外、ひつそりとして人の氣勢もなく、秋近い日光が乾いた土にキラキラと照つて居る。

少し乾いた櫻の葉をカサ〳〵と鳴らして、裏窓から來る風は、彼の頰に快く觸れた。

新一は暫くの間、何を見るともなく、何を考へるともなく、涙に滲んだやうな眼で恍とりと空を見て居たが、

「待つてるだらう。」と、呟くやうに獨言つて、手早く硯箱の蓋をしたり、帳簿を片附けて、紫メレンスの風呂敷包みを小脇に抱へて、小急ぎに出て行つた。

門の處に遊んで居た子供等は、輕いタスカンの帽子を戴いて、白く乾き切つた土に靴の音を鳴らして來た新一の姿を見附けると、バタ〳〵と馳け寄つて忙しく禮をした。

「先生、先生！」と、さも懷しさうに腰のあたりに縋つて來た。

新一はニコ〳〵した笑顔を見せて一寸足を止めた。

「皆さん、仲好く遊んで居ますね。」と、優しい眼をくれて、「左樣なら。」と、既に閉つた門の潜戸を衝と潜つた。

其二

「まあ、何んて綺麗で御座いませう。ねえ、兄さん。」

文子は小高い處に出ると、其處から右斜めに見下せる岩に激して水の奔騰する箒川の滔々たる流れを望んで、思はず斯う嘆美の聲を放つたのである。

激流の迸しる流れに沿うて、兩岸には山が峙り立つ。水は窮まらんとしては又曲り水の曲る毎に山も亦折れて、山と水とは相追ひ、相隨つて、狹まるかと思へば展き、展くかと思へば忽ち狹まつて、幾度か紆餘し曲折して、奥へ〳〵と限りなく續いて居る。流れに添ひ、山の端を削つて、漸く人の通ふ道がある。

「此處が七つ岩と云ふ處だ。あれ彼處に見えるだらう。」と、兄の雄二郎は立止つて、金金具の光る黒檀のステッキで、迥かの谷に見える重なるやうに聳えた岩を指した。

「あの七つ岩は此處から見るとさうでもないが、近づいて見ると一つ〳〵が何丈と云ふ大きな岩だ。そして、形も、色も一つ宛違つて居るので、丁度巨人が蹲まつて何かを語り合ふやうな樣子にも見えるね。――一體鹽原と云ふ處は、水の色から、山の形から、溪の勾配から、紅葉の工合まで日本特有の山水で、外國には決して見ること

の出來ない景色ださうだ。」と、說明して聞かせながら、指し示す度に手首の先の眞白いカフスが際立つて、夫婦釦の金具が、何うかした工合で日光を受けて、チカ〳〵と光る。

「全くね。油繪よりも墨繪の方だわね。」

「先刻見た小太郎が淵と此の七つ岩とは、鹽原の中でも私の一番好きな處だ。」

「ほんとに小太郎が淵も好う御座いましたわね。」

二人は又そろ〳〵と歩き出した。すつきりとした洋服姿の雄二郎と、ハイカラな文子の姿と睦しさうに語りながら行く樣は、年頃から云つても、人品から云つても、餘所眼には羨しいやうな、似合ひの夫婦であつた。兄妹と見る者はなかつた。

削り取つた山の崖際に添うて曲らうとする岩鼻の角で、先に立つた雄二郎は、パッタリ出逢つた青年を見ると、

「オヽ、新一君！」と、半ば驚きを含んだ聲で、思はず幼い時から呼び馴れた名を懷しさうに呼んだ。

思ひがけず自分の名を呼ばれて、立止まつた青年は、

「やア、米津君！」と云つた切り、二人は言葉もなく其の儘立つて、互ひに顏を見合つて居た。意外と、懷しさとに、此の咄嗟の間に洩らす可き適切な言葉がなかつたのである。

「新一君！こんな處で君に會はうとは全く思はなかつた——。して君は何時から此方へ來て、今、何うしてるんだ。」

「去年の夏——學校を卒業すると直ぐに來て、今では小學校の敎員を奉職してる。——」

——しかし、一別以來だね。」

「全く久し振りだ。それにしても君がこんな處で敎員になつて居るとは、實に意外だ。恐らく君を知る者で、君の今日の境遇を想像し得る者は一人もあるまい。」と、親友の身の上を痛むやうな眼色をして、其の姿をそつと見た。

新一は案外快活な笑ひを浮べて、「ハ、、、。變つたので驚いたらう。」と云つたが雄二郎の後ろに伏眼になつて居る文子を見て、

「御令妹の文子さん？」

「あゝ、妹の文子だ。大きくなつたらう。」

と、文子に向つて、「文さん、新一君だ。そら、御庭でテニスをして遊んだことを、何時もよく噂するぢやないか。」

文子は少し進んで、雄二郎の傍に寄り添ふやうにして、

「ほんとにお珍らしう御座います……。」と、會釋して、チラと新一の顏に其の賢し氣な眼を馳せたが、ポッと頰を赤めて、俯向いて了つた。

「全くですね！」と、新一も力强く文子に答へたが、何か昔を考へ出すと云ふやうな眼付きをした。

「君の處でテニスをして遊んだね。――あれから何年ぐらゐになるか知ら？　喧嘩もしたし、文子さんなどよく泣かしたものだ。其の後君の御兩親が突然亡くなられて、文子さんは伯母さんの方に引き取られた。それから些とも會はないのだから……隨分長いことになるね。」

其の言葉には、さも昔を懷しむと云ふやうな、しみ〴〵とした調子があつた。

雄二郎も同じ思ひに引き入れられて、「さうさ、其の後君は文子とは會はないのだね。確か七八年にはなるよ。――どうだ、美人になつたらう。」

「うむ、全く美人になられた。」

「あら、そんなこと……。」と、耳の根元まで赤く染めて睨めるやうに兄の顏を見た。

雄二郎は眼元に笑つて、「美人と言はれて怒る奴があるか。」と、云つたが、急に改まつて、「時に君は何故こんな處に引つ込んで居るんだ。君を知る者は、君の才、君の技量を皆惜んで居る。――何うだ、之れを機會に再び廣い天地で活動しては。僕は衷心からお勸めする。」

斯う云つた雄二郎の言葉にも、其の眼にも、親しい友を思ふ信實が溢れて居た。

「有難う！」

新一も感激の聲を喘ませたが、直ぐ不斷の調子に戻つて、「僕も少し考へがあつて斯うしてるんだが――何に、一生此の方が却つて暢氣で好いかも知れんよ。」と、淋しく

笑つた。

「しかし、君も今の境遇に衷心から滿足してるわけでもあるまい。何うだ、好い加減で東京へ出て飛躍を試みては。」

雄二郎は何處までも新一の才を惜んだ。此の儘こんな草深い田舍へ埋めて置くのに忍びない。出來るものなら勸めて勇氣ある活動を思ひ立たせやう。それが彼の眞情であつた。

「それは、僕だつて一生を此の田舍に朽ちるのが本意ぢやない——けれども此の通りの無一物では、何事も出來ないさ。」と、投げるやうに云つた。

雄二郎は言葉に力を入れて、それを打ち消すやうに、「いや、失禮だが其の點では、僕に出來るだけの力を盡さう。又、便宜も計らう。」

其の熱心な友の言葉を、新一は情なく遮つて、「折角だが——お斷りする。」

「何うして？」

「僕は他人の恩惠を受けることを好まん。」

「他人と云つたつて、君と僕とは親友の間柄ぢやないか。」

「親友でも恩惠は恩惠だからな。——恩惠のあるところ、必ず束縛がある。」

「お互に力になつたり、なられたりするのが、友人同志の當然の義務ぢやないか——僕は君に僅かの力を盡したつて、決して君の自由を束縛するやうな、そんなことはせん意りだが……。」

「それは分つとる——御厚意は感謝する。けれども僕の良心の束縛があるから、好まん。」

「何うしても可かんかなア。」と、雄二郎は嘆息するやうに云つて、「君の如き有爲の士を、こんな片田舍に朽ちさすと云ふことは、親友の僕としては忍びんところだ。——いや、單に僕のみではない、君を知る總ての人は、君の人物を惜んで居る。一緒に學校を出たクラスメートで、四五人落合ふと噂は必ず君の事に及ばんことはないよ。誰だつて君が行方を晦ましたことを、不思議とせん者はない、——或る者は、和田のことだ、今に何事をか爲出來して、突如として現はれるだらう。と、斯うまで期待して

居る者もある。それが、こんな田舍で教員をして居ることを知つたら、どんなに失望するか――僕は、友人の義務としても、是非君を引つ張り出して一角の仕事をして貰はねばならん責任を感ずる。何うだ、思ひ返して僕の忠告を容れてくれるわけに行かないか。」と、友を思ふ誠心は面に現はれて、熱心に說き勸めた。

新一もさすがに動かされて、熱した眼をして雄二郎の面を無言に見詰めた。其の眼には涙さへ光つて居た。

「それ程迄に思つてくれる君の友情は、實に何と云つて感謝して好いか……しかし濟まんけれども之れだけは僕の我儘を徹さしてくれ給へ――僕にも少しは考へがある。眞逆此の儘一生を老い朽ちて了ふやうなこともあるまいと思ふ。獨立獨行は曲げることの出來ない僕の主義だ。いや、信仰だ。」

其の言葉には石の如く固い響があつた。とても曲げることの出來ない決心を見て取つた雄二郎は、

「相變らず君の意志の堅固なのには敬服する。――僕も君の信仰を尊敬して、强ひてはお勸めしない。が、萬一の時の相談は必ず遠慮なくしてくれ給へ――僕に出來るだけのことは必ず盡す。」

「有難う！」と、二人の固い握手は、しつかと交されたのである。其の手と手からは男と男とでなくては理解することの出來ない、意氣が通つて、無言の間にお互の胸に響くのであつた。

やがて新一は手を離して、日射しを眺めたが、「大分遲くなつた――最う失敬するとしよう。」

「ぢやお別れか、僕は楓川樓に居るから、是非今晩でも遊びに來てくれ給へ――懷舊談に語り明さう。」雄二郎も殘り惜しさうに云つた。

「いづれ其のうちお伺ひする。では、文子さん、左樣なら。」

「お待ち申して居りますから是非……。」と、文子は一歩進んで追つかけるやうに云つて、すた〳〵と行く新一の後姿を見送つた。

赤く色附いた紅葉の梢を掠て來る初秋の日光は、パッと明るく文子の横顏を照した。

「和田さんは全く、敬員なんかには惜しい人物だわね。」

「お前、惚れたね。」

「あら、さうぢやないわ。」と、文子は眞氣になつて打消したが、顏は嬉しいやうな、恥しいやうな色にぽつと赤く染まつて居た。

「隱したつて、そら、ちやんと其の顏に現れてるぢやないか——まあ好いさ。」と、一人呑込んだやうなことを云つて、先に立つた。

第四章

新一の宿を借りて居る家は坂卷幸介と云つて、主人は最う六十の上、それに眼の不自由なところから碌な仕事も出來ず、僅かに湯治客の足腰など揉んで、其の日の細い生計を立てゝ居る。それとても一家の人々が粥を啜る料にも足りない。

長男の東吾は六年前に出奔したぎり行方不明で、今に音信不通である。家には今年

十八歳になるお妙と云ふ娘と、八歳になる富也との三人暮し——母つた。

貧しい中にも姉弟は至つての孝行者で、お妙が女の屠弱い手に薪など取つて町に賣つて暮の助けをすれば、富也は、父が客に招かれると、其の手を引いて宿までの送り迎へをする。

「お父さん、此處は崖の端で道が狹いから危いよ。」

客の迎へがあつたので、手を取つて父を送つて行く富也は、斯う注意した。

幸介は見えぬ眼を伴の小さい手を頼りに、トボ〳〵と歩きながら、「さうか〳〵前も危いよ——なる丈け危くない方に寄つての。」

注意されて富也は出來るだけ崖際を離れたが、山から、溪から最う一面に赤〳〵た紅葉の、眩しく日に輝くのを眺めて、

「あゝ綺麗だ。すつかり紅くなつたよ。一寸でも好いからお父さんに見せたいや

「ふ、、、。お父さんはどんな事をしたつて見られないから、富坊、お前お父さんと

二人分見てくれ。」

「お父さんの眼が癒らないか知ら。――僕、姉さんと二人で藥師樣にお願申したけれども、駄目なんだもの。」と、急に聲も悄氣るのであつた。

其の可憐い言葉を聞くと、見えぬ眼をショボ〳〵と涙含んで、「富坊、お前それ程お父さんのことを思つておくれかい。」と、曳かれて居た我が子の小さい手を、力を籠めてキユッと握り緊めた。

「お父さんはな、お前と姉さんとで孝行してくれるので、それで澤山だ。眼が見えなくとも、何の不自由なことがあるものか。――だから、藥師樣や何か、そんな危い處へお出でゃないよ。怪我でもすると本當に困るからね。」

「藥師樣なんか、最うお願ひを聞いて下さらないから、行かないよ。僕はねお父さん今にお金持になつて、お父さんを東京の好いお醫者樣にかけて、見えない眼を屹度癒して見せるよ。」

「坊がそんなになるまでには、お父さんは最う本當に眼を瞑つて了ふよ。ハ、、、、

、。」と、表面は笑つて見せたけれども、心の中は熱湯を呑むよりも愁かつた。――

い――未だ何の頑是もないやうな子が、親なればこそ斯うまで自分を思つてくれる。――其の可憐い言葉を聞くにつけても、幸介の心に浮ぶのは、不孝な長男の東吾の上であつた。孱弱いお妙が女の腕に暮を助けようと、娘盛りを殆んど風采も振りも關はずに立働く――弟の富也は未だ八歳の、本來なれば惡戯盛りを、眼の不自由な自分の爲めに、優しい心盡しの世話から、神佛にまで信心籠める、其の誠心を傾けて孝行を盡してくれる二人の至情をひし〳〵と感じれば感じる程、親や妹弟を捨てゝ、自分の好き自由に便りもなく飛び廻つて居る其の心根が憎い。二人の子供が苦勞に窶れた樣を見れば見る程、愚痴ではあるが「今、東吾さへ居てくれたなら？」と、猶更に憎くなる。

けれども、眞實血を分けた親と子である。憎んで憎み通せないのが親の心だ。憎む心の半面には、可愛いと云ふ情が潜んで居る。――いや、可愛ければこそ憎みもすとのだ。憎い奴だと思ふ心は、何時の間にか、親妹弟を捨てゝ、今は何處の空に彷徨つ

て居るか、無事で居るか、餓ゑては居ないか――雨につけ、風につけて、其の身の上を案じてやる親の慈悲心に變つて居る。

「兄さんさへ居てくれゝばな、お前たちにもこんなに苦勞ばさせないのだが……。」

「兄さんは何時歸つて來るの？」

「さあ、何時になつたら歸つて來るか――あんな奴のことだから、一生歸つて來るやうなことはあるまい。お父さんはな、お前たちが斯うしてお父さんを大事にしてくれるにつけても、兄さんの奴が憎くてならないよ。彼奴さへ居てくれたら、お前たちにも斯うまで難儀苦勞な目は見せまいものをと思つてな。」

「お父さん、今に兄さんは屹度歸つてくれるよ――そして、お父さんを大事にして、僕たちを可愛がつてくれるよ。」

「そんな奴だと好いのだが――今頃は何處の空を彷徨いて居ることか。」と嘆息した。

富也も、幼い心に、父親の沈んだ顏色に其の心持を讀んで、打ち濕つた淋しい心持になつた。

で、二人は何時ともなく默り込んで了つて、危つかしい崖際の道をトボ〳〵と辿つて居た。と、向ふから腰つぺたに絞りの三尺を結んだ破落漢らしい二人の酔漢が、狹い道をひよろ〳〵しながら近づいて來た。そして、富也が父の手を引張つて避ける間もなく、一人の男は、故意か偶然か幸介の胸のあたりにドシリと突き當つた。

「あつ！」

と眼の見えぬ幸介は不意のことに、驚きの叫びを上げた。よろ〳〵と後ろ向きに蹌けて下駄が小石に躓くと、痩せた、背の高い其の身體は、富也の手を離れて、バッたり石道に倒れた。

「お父さん！」と、富也は馳け寄つて、手足をもが〳〵して居る父を助け起した。

「こう、何だつて俺らに突き當つたんでい。」と、酔漢の一人は縺れる舌で怒鳴つた。

そして、酒の爲めにドロンと底濁りのした眼を怒らして幸介の面を見据るたが、

「や、手前盲人ぢやねえか。盲人なら盲人らしく神妙にして隅つこの方を通りなよ。往來の眞中を大びらに杖など振り廻して歩きやがつて、物騷な奴だ。」

富也に漸く扶け起された幸介は、強か撲つた腰のあたりの痛みを擦りながら、相手が悪いと其の聲に感附いたので、

「何うか御勘辨下さいまし。」と、下手に出て謝つた。

「盲人に突き當るのは、突き當る方が悪いや。」

富也は、一歩前に踏み進むと屹と云つて、其の賢し氣な眼に睨むやうなかさを持たせて、相手の顏を見据ゑるのであつた。

「何だ、此の餓鬼！　生意氣なことを云ふな。」

「富坊、お前餘計なことを云ふものでない。」と、幸介は我が子を宥めた。相手が悪い——難かしくしてはどんな難儀にならぬとも限らぬと案じて、無理を通しても穩かに此の場を濟ますさうとした。

「だつて、此の人達には眼があるけれども、お父さんには眼がないんだもの、眼のある人は除けて通るが好んだ。」

二人の酔漢は眼を怒らして小憎げに富也を睨んで、

「何を吐しやがる。」

酒の元氣に理も非もない獸のやうに、猛り立つて、腕を卷いて親子を撲らうと氣負つた。

「こら、何をするんだ！」

突然大きな聲がして、其所へ、息急しく飛び込んだ男があつた。

「あゝ、和田さん！」と、思ひ掛けぬ助けに富也は喜びの聲を上げた。

幸介はそれを聞くと、「何、和田さん……。」と、之れも力附いた。

新一は雄二郎に別れて歸りを急ぐ道筋で、何か人がゴタ〳〵して居るので樣子ふと、意外にも幸介親子の難儀なので、行也飛び込んだのであつた。

「貴樣達は何うしたと云ふのだ。こんな眼の見えない者や、小さな子供を相手にして？」と、言葉は穩かではあるけれども、嚴かな態度で屹と云つた。

二人は、思ひ掛けぬ人が入つたので少し尻込みの形で、「何アに、此奴が人に突き當つて置きながら、いろんな憎體口を利くんで……。」

「どんなことを云つたか知らんが、老人や、子供を打擲するとは宜しくない。――縱し盲人が突き當つたにしても、それは故意としたことぢやないのだから、眼の明いた者が勞つてやるのが至當ぢやないか。」と、新一は物靜かな調子で、理を責めて懇ろに諭した。

「いや、何うも惡う御座いました。」と、初めの勢ひには似合はず存外穩かな調子に折れて、溫柔に謝つた。

「さう事が分れば何よりだ。――お父さんは別に怪我はありませんでしたか。」

「いや、お蔭で災難を遁れました。どうも有難う存じます。」

二人は顏を見合せて、幸介と話して居る新一の姿をチラ〳〵と見ては、眼と眼で何か語つて頷き合つた。と、一人は衝と進み出て、

「貴方は和田さんと仰言るのでせう。」

新一は、こんな男に自分の名を聞かれることを訝しく思つて、眉を顰めた。

「如何にも私は和田新一だが……。」

それを聞くと二人は顏を見合せて北叟笑んだ。

「かう、丑衆、丁度好いところでお目にかゝつたな。」と、仲間に呟くと、一人は前に進んで、

「實は、今、お前さんの處へ行くところでした。」

「何、私に用がある？」

「用がないのに行くもんですか。――かう、是れだ。これはお前さんの證文でせうね。」と、懷中を探つて、一通の證書を新一の眼の前に突き附けた。

新一はそれを見るとサッと顏色を變へたが、やがて左もない體で、

「いかにも私の借用證書だ。」

丑造は、少し嘲り氣味の冷たい笑ひを其の厚い唇のあたりに浮べて、「乙う澄しておいでですな。昨日で期限の切れて居ることは御存知でせうね。」

「それは知つとる――だが、お前達は一體何んだ？」

「私等は、野々山親分の使ひでさあ。五十兩の金に親分自身で出掛けることもないか

らつてんで、私どもに直ぐ金を受取つて來いと、斯う言ひ付けられたんで……。」
「野々山さんのお使ひだね。」と、念を押して、二人の頷くのを見て、「承知した。しかし、今斯うして學校から歸りだから、直ぐ云ふわけには行かぬ。晩までには屹度届ける。と、さう云つてくれ。」
「大丈夫ですかい——五十兩ですぜ。お前さんの月給とは金高が違ひますぜハ、、、、。」
新一は其の無禮な一言に、ピリ、と眉を動かしたが、又、思ひ返して顏色を柔らげた。
「晩までに返すと云つたら異存はあるまい。」
「屹度ですね。」
「屹度だ。」
「間違ひさへなければ好いやな——。」
「では歸つて親分にさう云ふことにしよう。——いや、何うもお喧ましゆう。」

二人の姿は紅葉の樹の間隱れにチラ〳〵動いて居たが、やがて山の出鼻を曲ると、見なくえなつて了つた。
新一は幸介親子の居ることも忘れたものゝやうに、茫然として其の後を見送つて居た。今の場合の行きがゝり上、「晩までに屹度！」と、固く約束の言葉を誓へたやうなものゝ、其の金の出來る的はなかつた。
幸介はおづ〳〵と進み出て、
「和田さん、今の五十兩と云ふ借金は、あの何時か私の病氣の時に救つて下すつた、あのお金で御座いませう。」
新一は、初めて我に返つたやうに振り返つて、幸介の姿を痛ましさうに見た。
「いゝえ、さうではありません。」
「お隱しなさつても、私はよく存じて居ります。失禮ですが貴方の今の御身分で、五十圓と云ふ大金が餘裕のあるわけが御座いません。どうか、包まずお話し下さいまし。」

新一は其の言葉を抑へるやうに、「お父さん、決して御心配下さいますな。貴方と私との間柄で、五十圓ぐらゐの金は、何んでもないぢやありませんか。」

「ですが、それを返す見込みが貴方に御座いますのですか。」

「さあ、それは別に斯うと云ふ確かな的もありませんけれど……。」と、思案に餘つて微な溜息を吐いた。

「貴方は、野々山と云ふ男をよく御存知なので御座いますか。」

「よくは知りません。」

「あれ程の惡徒が、貴方に五十圓の金を貸したと云ふのは、何か思はくがなくては貸しますまい。」

新一は故意と其の話を避けて、

「しかし、まあ何うにかなるでせう。」と、言葉を紛らした。

幸介は何處までも追つかけるやうに、「今晩までとお請合ひなさいましたね。」

「え、今晩までとは約束しましたが……しかし困つたな。」と、當惑は自然と嘆息となつて出た。

「お金を返さなけれや、今の人が和田さんや、お父さんを苛めるの――僕がね、大きくなつたら五十圓でも、千圓でも返してあげるよ。」

富也は、先刻から二人の話に耳を傾けて居たが、斯う云つて父と、新一の顔をつくづく見交すのであつた。

新一は其の頭を可憐しさうに撫でゝ、「子供はそんなことに心配するものぢやない。一生懸命に勉強さへすれば好んだ。」

「だつて、僕は心配になるもの……。」

「和田さん、私ども親子の爲めに、貴方は飛んだことになりましたね。」と、我が身の不甲斐なさを恥づるやうに、つく〳〵嘆息した。

「なに、大丈夫です。心配しないでも何うかなります。」

新一は、何か心に決するところがあるものゝやうに力強く云つた。

「それでは氣を附けてお出でなさい。富也さん、氣を附けてお上げよ。」と、大跨に歩

み去つた。

其二

幸介は何時までも其處を動かうとしなかつた。ぼんやりと衝つ立つた儘、何事を深く考へ込んで居た。

「貧。」――思へば世の中に之れ程愁いことがあらうか、憂いも、愁いも、浮世の苦勞は皆金故である。金さへあれば花の眺めも面白からうし、月の眺めも美しからう。けれども、貧しい者の身には、花の盛りを見るにつけ、月の美しさを眺めるにつけても、それは皆悲みの種である。孱弱い娘や、幼い子供に悲しい思ひをさせたり、愁い目を見せるのも、皆、其の金がないばかりである。

此の春の大病の時、生きて甲斐ない此の老い朽ちた不具の身體を救つてくれた新一の親切の五十兩の金は、新一自身の身を詰めるやうな金であつたのだ。其の金の爲めに、新一の身の上には今恐ろしい災厄が羅らうとして居る。それを知りながら、何う

して自分だけ安穩で居られやう。

それに、自分のやうな厄介者が生きて居ればこそ、子供達も一倍の苦勞をせねばならぬ。生きて居て邪魔にこそなれ、何んの甲斐もない此の生命だ！

思ひ詰めて幸介は、咄嗟の間に決心した。

「富坊、此處は崖端だね、下は隨分深からうね。」と、しよんぼり立つて、何を見るともなく空を眺めて居る富也に聞いた。

「あゝ、深いよ。」

「どうか、最う一度此の眼が明いて、お前の顏を見たいな。」と、幸介は熱い心からの嘆息を洩らして、我が身を呪ふやうに云つたが、富也を傍に引寄せて、せめても其の顏を撫でるのであつた。

「僕が大きくなつたら、屹度明くやうにして上げるよ。」

「お前はそんな可憐しいことを云ふけれど……。」と、最う堪らなくなつたやうに身體をしつかと抱き緊めて、其の小さな、柔らかな頬に、自分の痩せた頬をひしと押し附

けるのであつた。其の目には涙が一ぱい溢れて居た。

やがて氣を取り直して、「誰か來はしないかね、一寸見ておくれ。」

「あゝ、誰も來はしないよ。」

「さうか。」と、又、懷しさうに富也の頭を撫でゝ、「早く大きくなつて、立派になつてくれよ。」

「お父さん、僕は偉い人になるよ。」と云ふ其の暇に、思ひ極めた幸介は崖端に探り寄つて、一と思ひに身を飜して、躍り込まうとした。驚いた富也は、父の腰のあたりにひしと抱き附いて、

「お父さん！　どうしたのお父さん。僕は厭だ。」と、泣聲に叫んで、細い腕に有らん限りの力を籠めて、引き止めた。

「富坊、止めてくれるな！　愁にこんな厄介な盲目爺が生きて居ればこそ、姉さんも、和田さんも、お前までが苦勞せねばならんのだ。――今日のことも和田さんに面目ない。お父さんが死んで了へば、皆が樂が出來る。さ、放して死なしてくれ。」と、

涙ながらに絞るやうな聲で云つて、獅嚙み附く小さな手を振り離さうとした。けれども、離せば父の生命がない！　富也の手は蛇の如く執念く絡み附いて離れなかつた。

又、其處には一圖に振り切ることの出來ぬ、恩愛の絆があつた。

「お父さん、可けないよ、お父さんが死んだら僕も死ぬ。」

「これ、お前は何を云ふ。」

「お父さん、厭だ――死んぢや厭だ！」と、必死になつて、哀れにも父の命を其の小さい腕に繫ぎ止めようとする――此の幼い魂がさうまで自分を思つてくれる、其の心根を汲んでは、一途に思ひ極めた決心も、さすがに鈍るのであつた。

幸介は暫く富也の手をしつかと握つて居たが、

「斯うして居ては時が遲れる！」心の底から突き上げて來る決心に勵まされて、

「さあ、放してくれ。」と。老いても未だ幼い者には勝る力に、獅嚙み附く子供の手を無慈悲に振り切つて、將に身を躍らさうとした。

「これ、何をするのだ！」

間髪を容れざる一刹那、不意に其處へ現はれた男が、聲を嚇まして叫んで、しつかと幸介の身體を兩腕に抱き窘めた。――身には粗末な墨染の衣を着て、白い手甲に、白い脚袢、頭は未だ剃り立ての、年若い青道心であつた。

「誰方かは存じませんが、どうぞお放しなすつて下さいまし。」と、幸介は抱き窘められた身を藻掻いたが、男は其の手を緩めようとはしなかつた。

「いや放しません！」と、動もすれば其の手から遁れようとする幸介を漸う〳〵に宥めて、初めて其の顏を見ると、男の顏色はサッと變つた。

「貴方はお父ッ！……」と、思はず叫びが唇まで出たのを、漸く嚙み潰した。

「と、飛んでもないことをする方だ。何う云ふわけがあるのか知りませんけれども、自殺までなさらんたつて、外に何んとか仕樣がありさうなものぢやありませんか。」努めて落附いて云つたけれども、其の聲はひどく慄へて居た。

「坊さん、有難う！　僕は何うしようかと思つてたところなの。」と、富也は涙を拭つて、小さい頭を下げるのであつた。

若い行脚の僧は、しげ〳〵と愛しさうに其の顏を眺めて、「坊ちやん、一體何うしたと云ふのです？」

「あのね、お父さんは此の間まで病氣をして居たの。それでお藥買つたり何んかするお金がないもんだから、和田さんが出して下すつたの。」

「和田さんと云ふのは？」

「家に泊つて居る學校の先生さんよ。僕は和田さんが一番好きなの。」

「それから何うしたの？」

「和田さんが出してくれたお金はね、他處の人から借りたんだつて、それを返せ〳〵つて苛めるものだから、和田さんが困つてるの。それでお父さんは死んで了ふんだつて。」

「あゝ、よく分りました。――さうでしたか、お父さんも、貴方も隨分苦勞をなさるんですね。」と嘆息した。

其處に先刻から面目なさゝうに小さく蹲つて居る幸介に向つて、「いや御老人、決し

て今のやうな短氣なことをなさるな。貴方が死んだところで金が湧いて來るわけでもなし、却つて和田さんと云ふ親切な恩人に迷惑をかけるばかりぢやありませんか。其の人が教員を奉職して居れば、貴方の變死の爲めに借金のことも自然公になり、其の爲め免職にでもなるやうなことがあつては、却つて恩人に濟まないことになるではありませんか。」訓すやうに、慰めるやうに、理を盡した其の言葉には、深い情愛の響が籠つて居た。

「はい、よく分りました。」と、幾度か頭を下げた幸介の眼には、涙が浮いて、ホロリと其の痩せた頬を傳ふ。

眼の見えぬ幸介の哀れ氣な有樣を見詰めて居た旅僧の瞼には、何故か知らず自づと涙が溢れて來た。

「貴方は、何時から眼が見えなくなりました。」

「はい、丁度六年前で――此の子が二つになる時で御座いましたから……。」

「年が寄つてからでは、さぞ御不自由でせう。」

「元と黑磯に居りました時分には、相當に暮して居たのですが、妻が亡くなる、私が長の患ひをする、折り重なる災難で少々有つた物も殘らず無くして了ひ、漸く按摩稼業で此方へ渡つて參りましたが、年を取つては何をしても役には立たず、今では娘が山稼ぎをしたり、手內職の助けで、其の日の暮しを細々ながら立て居ます。」と、老の心弱さに、愚痴と知りつゝも、我が身の上を語るのであつた。

「僕の姉さんは親孝行よ、――兄さんは親不孝だけれども。」

「何、兄さんが……？」

「兄さんは僕が二つの時に、何處かへ行つて了つたの。」

「其の兄さんの顏を、貴方は知つて居ますか。」と、ぢつと富也の顏を眺めた。

「僕は知らないの。」

「知らない――さうでせう。二つの時に別れたんでは、無理もない、しかしね坊ちやん、貴方の方では忘れても、兄さんの方ではよく覺えてるでせう。いや、確かに覺えて居ます。お父さんのことも、姉さんのことも、貴方のことも、何んで忘れるもので

すか、雨につけ、風につけ、思ひ出さないことはないでせう。」と、我にもなく気して力強く云つた。

「だつて兄さんは、親不孝ですもの。」

「全く親不孝です。こんなに年を取つたお父さんや、貴方のやうな可愛い弟を捨てゝ行くなんて、實に憎むべき不人情です。しかし乍ら、兄さんが歸つて來られないに就ても、よく〳〵の事情があるのでせう。時節さへ來たら屹度歸つて來られるでせうから、それまでお父さんに孝行して、待つてお出でなさい。」

幸介は、其の眞實の籠つた言葉を聞いては、他人とは思へぬまで嬉しかつた。少しばかり膝をにぢり出て、

「見ず知らずの方がいろ〳〵親切に云つて下さるにつけても、あの親不孝者奴のことが思ひ出されます。先き程から貴方のお聲柄で、丁度俥の年恰好ぐらゐだと思つて聞いて居りますが、せめて貴方の半分でも彼奴に優しい心掛があつたら……と、つい愚痴な涙も滾れます。」と、涙に濡れた老の瞼を、ショボ〳〵と瞬く。

旅僧も暗然とした。

「此の坊さんが兄さんだと好いなあ、親不孝でも僕は兄さんが居てくれると好い。」と最う先刻の悲しさは忘れたものゝやうに、晴れ〴〵とした罪のない眼で、旅僧の顔を見上げた。

其の無邪氣な顔を眺めると、我にもなく、「弟！」と呼んで、ひしと其の身體を抱き、緊めようとした。が、思ひ返した。涙に光つた眼でぢつと富也の面を見ると、二人の眼はヒタと合うた。隱しても隱すことの出來ない血肉の愛が、其の眼に火の如く燃えてるではないか！

「親不孝の兄さんでも、そんなに懐しいか。」と、旅僧の聲は慄へて居た。

「えゝ。」と云つたが、何事かを直覺したやうに、

「兄さん！」と、鋭く叫んで、旅僧の手に縋つた。

「うむ。」と、思はず其の手を屹と握り緊めたが、急に氣が附いて靜かに離した。

「あゝ、兄弟の情だな——。いや、私は兄さんではないけれども——ハ、、、、、思、

はず貰ひ泣きしました。」と、何氣なく打ち消して、笑つた。――其の聲は、恰も乾からびたやうに淋しかつた。

「兄さんぢやないの。」と、富也は物淋しく其の顔を見た。

何時の間にか日は落ちて、空に殘つた名殘りの光りは、山の際々を眩いばかり明るく彩つたが、溪々には暗い陰を置いた。

「ぢや、餘り遲くならない中に……」と、心强くも思ひ切つて促した。

幸介はしほ〳〵と立ち上つて、「どうも、いろ〳〵御親切にお世話を下さいまして有難う御座います。――それでは貴方……。」

「坊さん、有難う。」と、富也も小さい頭を下げた。

「どうか身體を大事にして、今のやうなことのありませんやうにね。――坊ちやん、兄さんと二人分の孝行をして上げて下さいよ。」

親子は又手を引き合つてトボ〳〵と行く。けれども蟲が知らすか、幸介は幾度びか振り返つて、見えぬ眼に伸び上り〳〵した。富也も立ち止まつては、懷しさうにしよ

んぼりと見返る。それを見送つて居る旅僧の心の中は、熱鐵を以て、心の臟をヂリヂリ燒くよりもと愁かつた。

「お父さん、許して下さい！」と叫んで、地べたに跪いた。

第五章

山合ひの秋の日暮れは早く來た。五時と云ふに最う仄かな闇の色は薄らと四邊に漂うて、物の色がしつとりと打沈んで佗びし氣に見えた。

坂卷の家では幸介も富也も未だ歸つて來なかつた。新一は學校から歸ると直ぐ、野野山へ返す金策に出掛けて行つた。一人留守を守るお妙は、夕闇に白い顏を浮かして背戸の井戸端でせつせと米を磨いで居た。心では新一の金策の結果を心配しながら。

「オイ、御免よ。」

斯う云ふ聲が耳に入つたので、お妙は白い顏を振返つて見た。裏まで筒抜けに見え

る土間に一人の男が立つて居た。

「はい、誰方様で？」と、腰を伸した。ふつくらと肉附いた二の腕まで露はに見せて居たのを恥しさうに隠して、頬にほつれる後れ毛を、左の指にハラリと後へ撫でる。

「野々山の岩五郎だよ。お前の家に和田つてえ野郎が居る筈だが、見えねえやうだな。」と、薄暗くなつた家の中から、其の邊に鋭い眼を光らした。

「左様で御座いますか。實は貴方から拝借しましたお金のことで、只今他處へ參りましたのですが……。」

「なに、居ねえ……さうか。」と、頷いて、上框に腰を下した。

「オイ姐さん、濟まねえがお茶を一杯御馳走して貰えまいかな。」

お妙は小氣味悪く思つたけれども、斷るわけにも行かないので、濡れ手を拭きく臺所へ入つて來て、お茶を淹れた。

「ほんとに悪いお茶で御座いますけれども……」と、襷の片方を外して、しとやかに膝をついて勧めた。

仄かな夕の薄闇に、匂やかに白く浮いたお妙の顔を、眤と眺めて、「ハ、、、悪いお茶で御座いますけれども は爪はづれに出來てるな。家に歸つたら嬶に敎へて置かなくちやならねえ。」

お妙は、血の動き易い娘らしい柔らかな頬をサッと赤く染めて、七分の恥を含んで俯向いた。すつきりと白い其の襟脚が、水際立つて美しく、又、艶に見えた。

「妙な話をするやうだが……」と、岩五郎は急に改つた調子で、「今度俺の方から貸した五十兩の金は、表面和田の名前になつて居るけれども、實はお前のお父さんの爲めに借りたんださうぢやねえか。」

「はい、父が病氣の時に拝借しましたお金で御座います。」

岩五郎は腰から煙草入を抜くと、鉈豆烟管に一服吸ひ附けた。

「何でもそんな事だつてことを聞いたが――なに、和田の野郎に一文だつて貸すはねえんだが、お前のお父さんが困るつてえことを聞いて急に可哀さうになだから、慾徳づく抜きで貸したんだ。」と、煙を大きく輪に吹いて、俯向い

顔をヂロリと眺めた。

「しかし何んだな、表向き和田が借主になつて居ても、お前のお父さんの爲めに借りたのだから、お前の方で返すのが至當だな。」

「父がお返し申さねばならぬお金で御座います。」と、幽かに云ふ。

「それは當り前だ。」

響の太い聲を柔げるやうにして、「けれどもお前の方で返すと云つたところで、今差當つて五十兩の金が返せるか返せねえかと云ふぐらゐは、俺だつて知つて居る。何も俺は無理に取らうと思つて來たのではねえ。昨日が期限だのに和田から何んの挨拶もねえので、先刻子分の者を寄來すと晩までと云ふことだから、それでお神輿を上げて來たわけだ。お前の方だつて返す段になれや無理もしなけれやならねえ。けれども俺はな、お前の親孝行のことを聞いて其の心根にすつかり惚れ込んだ。そんな孝行者を五十兩ぐらゐの金で困らせ度くねえのが俺の本意だ。だからあの五十兩は器用にお前にくれて遣らうぢやねえか。」

「……」

お妙は餘り意外な言葉に、嬉しくもあるし、底氣味惡くもあるので、何う返答して好いか分らなかつた。唯、眼を見張つて岩五郎の顔を眺めるばかりであつた。

「どうだ、さう云ふわけなんだから、まあ貰つて置きねえ。」

「あの、拜借しましたお金を私に下さると仰言るんですか。」

「うむ、さうなんだよ。」と、頷いて見せる。

「まあ、本當に！」と、嬉しさうに聲を喘ませたが、又、思ひ返して、

「それでも、五十圓と云ふ大金を頂くわけが御座いません。」

「わけがあつたつて、無くつたつて、貸した俺が遣ると云ふのだから好いぢやねえか。」

其の言葉なり、顔色なりが、滿更ら笑談に云つてるとも思へない。けれどもお妙の心にして見れば、五十圓と云ふ大金を何んの理由もなく自分にくれる！　何う考へて見ても其の心持が呑み込めない。それに、相手の人物が人物だけに猶更氣味が惡い。

貰つた後でどんな難題を吹き掛けられるか。

——けれども、事實とすれば之れ程助かることはない。父の心配も、新一の苦勞も皆其の金の爲めではないか！

「頂きましても宜しいんでせうか。」と、不安さうに岩五郎の眼色を覗つた。

「好いどころぢやねえ。お前も疑り深いな。貸した當人の口から遣ると云つてるぢやねえか。」

「本當に下さるんですか——有難う御座います。」と、嬉しさに輝いた眼に感謝の意を籠めて云つた。

「本當だとも！何んで嘘を云ふものか——お前嬉しいだらう。」と、ニヤリと大きな鼻の邊りで笑つて、「それや嬉しいだらう。御亭主の災難が免れるのだからな。」

「あら、さうぢや御座いません！」と、耳の根元まで眞赤にして打消した。

「さうぢやねえ？では色男か——どちらにしても同じこつた。まあ好いやな、貰つて置きねえ。」と、獨り頷いて、「だが、幾ら俺の方で口先だけで遣ると云つたつて、

お前の方で信用出來ねえなあ尤もだ。——待ちねえ、茲に和田から取つた證文がある。此奴をお前にくれて遣つたら確かだな。」と、懷中を探つて、其所に出したのは正しく五十圓の借用證書であつた。

お妙は嬉しさうな表情を、其の美しい顏一ぱいに見せて、

「まあ、本當に頂いても好んでせうか。」と、證書と、野々山の顏とを見交すのであつた。

「あゝ本當だとも！」

「有難う御座います。父が歸りましたらどんなに喜ぶで御座いませう。」と、心からの感謝を其の凉しい双の眸に見せて、證書を納めようとした。

「一寸待ちねえよ。」と、岩五郎は聲で抑へた。

お妙はぎよつとして、出した手を手持無沙汰に引つ込めて、窃と野々山の顏色を覗ふのであつた。其の眸には、恰かも暴風の前の小鳩の眼に見るやうな、不安の色が動いて居た。

岩五郎の冷たい眼は、眤と其の可憐な姿を眺めて居た。

「どうでえ、俺も之れだけのことをして遣るんだ。ところでお前にも頼みがあるんだ。——こんな物を出して置いて云ふなあ些と可笑いやうだが、それは夫れ、これは是れだ。外ぢやねえが、實は俺の家は宇都宮で茶屋稼業を遣つてるんだが、此の頃は好い女中がなくて困つてるんだ。どうでえ、俺の家へ來て暫くスケてくれねえかな。」

「え、貴方のところへ奉公に！」

「あゝ、さうだよ。」

「こんなにどつさりお金を頂いたんですから、それや奉公へ參りましても宜しいのですけども、何分父の眼が不自由で御座いますのに、私が出て了へば後は少さい男の子と二人つきりなのですから、私が今居なくなつては、とても家が立行きません。」

「お前さへ家へ來てくれゝば、そんな事は何うにだつてならあな——。病院へ入れるなり、引取つて世話をするなり……」

「あの、そればかりぢや御座いません。私と和田さんとは近々……」と云ひかけて、

急に氣が附いて眞赤になつて俯向いたが、「矢張り父が困りますから奉公には……」と、口籠る。

岩五郎の眼はギロリと光つて、「來られないと云ふのか。」

「何分父が不自由な身だものですから……」

「それでは俺が之れ程云つても可けねえのか！」

「そればかりは……」と躊躇つて、慄へながら憐みを乞ふやうな眼付をした。

「さうかへ——其奴ア惡いことを云つた。」と、せゝら笑つて、「お前のお父さんが困らないやうに五十圓の金を遣らうと云つたのだが、可けねえと云ふなら仕方がねえ、それぢや止すさ。」

「あの、奉公に行かなくとも宜しう御座いますか。」

「だつて、厭だと云ふものは仕方がねえや。」

「父の眼が惡いものですから……」

「厭なら止すが好いやな。」と、忌々しさうに云つて眤と見据ゑた。けれどもお妙は

唯默つて俯向いて居るので、焦れつたさうに毛蟲のやうに太い眉をピク〳〵と動かした。

「何んでえ、此方では可哀相だと思つて不憫を加へてやれや、好い加減に附上つて、奉公は厭だなどゝ乙なことを吐しやがる。——大枚五十兩の金を無理にたあ言はねえや。厭なものなら止めろい。」と、威丈高に怒鳴つた。

「どうぞ御勘辨下さいまし。」

「何も謝らなくつたつて好いやなもの——厭だと云つて强情が張れるものか、張れねえものか——俺がそれで默つて張らして置くか、置かねえか、よく考へて見ろ。俺の方には斯う云ふ證文があるんだ。」と、其所に置いた證文を腮で指して、「和田は學校の先生をして居るんだな——學校の先生をしてる野郎が、五十兩と云ふ金を借りて、期限が過ぎても何んの挨拶もなしに胡魔化さうなんて、それで生徒の示しが附くか、附かねえか、俺は學校へ行つて多勢の前で談判するからな。」

「貴方、學校へゐらつしやいますことだけは、どうぞ勘忍して下さいまし。」と、縋るやうに、哀願した。

「學校へ行つちや可けねえ？　そんなら金を返すなり、奉公に來るなり、どちらにかしたら好いぢやねえか。」

「それでも父が……」と、言ひさして躊躇ふ。

「フン、父が父がつて面白くもねえ。言はして置けば、餘り勝手なことを言はねえが好いや。奉公には來ねえ、金は返さねえ、催促はするな——そんな蟲の好いことがあるもんけえ、人を馬鹿にして！」

「決して馬鹿にするなどゝ、そんな心はありませんのですけれど……」

「そんなら金を返すか。」

「でも、五十圓と云ふ金が今を今と云つても出來る的がないものですから……」

「ぢや、一體何うしてくれると云ふんだ。返答に依つちや、俺の方にも考へがあるんだからな！」と、煙草の煙を輪に吹いて、空嘯いた。

お妙は途方に暮れて、一人小さい胸を惱ますのであつた。——今の身の上では何う

工面をして見ても、五十圓と云ふ金の出來る的は夢にもない。けれども金を返さねば學校へまで行くと云ふ。――多勢の中で證書を突き附けられて、毒口を利かれる時の新一の恥と、恨み！　そして其の結果は免職！　而も其の金は父の病氣を助ける爲め新一の無理工面をしたものではないか――何うして默つて知らん顏に見て居ることが出來よう！　それを救ふには自分が素直に奉公に行くより外はない。新一との結婚も間近に迫つた今日、今更ら遠く別れて奉公に行くのは、死ぬよりも愁い。けれども父の爲め、愛する男の爲めに自分一人の身を犧牲に供して、其の死ぬよりも愁い奉公に行くのが、親と夫に盡す美しい孝と、貞とではないか。

斯う決心した。

「それでは、私が奉公に參りますれば、其のお金は待つて下さいますのですか。」

「お前さへ奉公に來てくれるなら、それや讀と歌よ。」

「私、奉公へ參ります。」と、思ひ詰めてハッキリ云つたが、堪へられなくなつて、其の儘其處に突つ伏した。止めようと思つても熱い涙は瞼を押して流れ出る。色の褪

せた、此の頃の氣候には肌寒さうな浴衣の袂を其の白い齒にキリ〳〵と嚙んで忍び泣く。

「奉公に來る――そんなら早くさう言やあ好んだ。俺だつてこんな厭なことは言ひたかあねえんだからな。」と、煙管を忙しさうに爐緣に叩いて、

「さ、泣かなくつたつて好いやな、何も之れが殺されに行くと云ふぢやなし、却つて今迄よりや好い着物も着られるし、樂も出來る。謂はゞ出世と云ふものだ。――それぢや機嫌を直して出掛けるとしよう。」と、一人で決めて立上るとお妙の手を取つて促した。

お妙は驚いて其の手を振り拂つて、涙に光つた眼に岩五郎を見て、「あの、今から直ぐ參りますのですか。」

「さうよ、愚圖々々して居て、又何う氣が變らないとも限らない。」

「私、奉公には參りますけれども、仕度もありますし、父にも言ひ聞かさねばならぬこともありますから……」

「仕度なんか、何うだつて好いやな。又、お前が行くと云ふのにお父さんに何んの文句があるものか――會つて居ては却つて未練が出て、悲しい思ひも増さうと云ふものだ。だから此の儘直ぐ行つて、後から子分の者でも寄來せば好いやな。」と、有無を言はせず、其の儘引つ立てるのであつた。無力な、可憐なお妙は、恰かも荒鷲に攫まれた小鳩のやうに、其の暴力に從ふより外はなかつた。

其　二

「姉さん、只今！」

表で元氣の好い聲で叫んで、富也は父の手を引いて歸つて來た。

其の聲を聞くとお妙は、岩五郎の手から遁れるやうに嬉しさうに馳け出て、

「あゝ、お父さん、富ちやん、お歸んなさい。」と、父の手を取つた。――涙は自づと迸るやうに湧いた。

「おゝ、今歸つたよ。――お客さんかな。」

「姐さん、これはお前のお父さんかの？」と、先刻から其處に立つて居た岩五郎は、意外と云ふやうに眉を顰めて、薄暗がりに幸介の顔を透かして眺めるのであつた。

「えゝ、父で御座います。」

「ふむ、分らねえものだな。」と、考へ込んだ。

幸介は其の聲を聞き咎めて、

「おゝ、貴方樣は先刻お療治に參りました桝屋のお客樣ぢやありませんか」

「さうだよ、桝屋の客で野々山の岩五郎だよ。」

「え！貴方が野々山さんで？」と、野々山の一語を聞くと共に幸介は飛び上らんばりに驚いて、見えぬ眼を見張つたが、「それでは矢張り和田さんのお金のことで御座いますな。」

岩五郎は再び其處に腰を据ゑた。「まあそんなものだよ。今、いろ／ころが金は何うしても出來ないから、姐さんが奉公に來ると云ふんだ。」

奥の薄暗がりでコツ／と二分心の洋燈に燈火をつけて居たお妙は、……

の言葉を抑へるやうに、「其のことは私から父によく話しますから……」

「どつちでも好いから早くしなよ。」

お妙は洋燈の心を加減すると、其處にキチンと座つて皆の顔を眺め交して居る富也に云つた。

「あのね富ちやん、先刻米屋さんから面白い寫し繪があるから富ちやんに遊びに來てくれつてお迎へを下すつたから、お前遊びに行つてお出でな。」

富也は嬉しさうに、「姉さん、行つても好いの。」と、眼が輝く。

「えゝ、姉さんが送つて行つて上げたいのだけれど、今御用があるから一人で行つてお出でね。」

「ぢやお父さん、姉さん、行つて參ります。」と、富也は立つて佛壇の前に行つた。そして、懷中から人に見られるのを恐れるものゝやうに紙包みを出して、窃つと小箱の傍に置いた。——それに心附く者は一人もなかつた。

「氣を附けてお出でなさいよ。」とお妙は、閾を跨ぐ弟の小さい後姿を見送つて

注意して、其の眼を又幸介の上に移した。しよぼ〳〵とした父の姿を今更のやうに眺と眺めて居ると、眼には自づと涙が浮いて、長い睫に一ぱい溜つた。

「早くしねえよ、俺だつて忙しい身體だからな。」と、岩五郎は煩悶しさうに催促して、疳高く煙管を叩くのである。

「お父さん、私を奉公に出して下さい！」何から云つて好いか心は混亂して分らない。行きなり唯それ丈け云ふと、堪へようとしても涙は又一頻り湧いて後の言葉は容易に續かなかつた。

「え！お前が奉公に？」と、思ひもかけぬ娘の言葉に驚いて、幸介は我が耳を疑ふやうに聞き返すのであつた。

お妙は唯聲を呑んで泣いて居る。込み上げて來る悲しさに袖を嚙んで忍ぶ度びに、つゝましい銀杏返しの髷は幽かに慄へて、何處から隙間洩る風が忍び込むのか、洋燈の焰は搖めく。

「コレ、お前が奉公に行くなどゝ云つて、何うしたと云ふのだ。わけをお話し——わ

けを……。」と幸介は急き込んで、自分の前に泣伏した娘の脊を、勞はるやうに撫でる。

「旦那がね、今直ぐにお金が出來なければ、學校へ行つて和田さんがお金を借りて返さないことを話すと仰言るんですよ。そんな事になつては和田さんが明日から學校へ出られなくなるでせう。若し和田さんにそんな迷惑をかけるやうなことがあつては、お父さんも私も濟まないんですから、私が居なくなつてはお父さんも嘸ぞ御不自由でせうが、どうぞ辛抱して私を奉公に出して下さい。私さへ奉公に行けば、其のお金を待つて遣ると仰言るのですから――私は死んだ氣になつて奉公に參ります。」と、健氣な決心を潔く云つたけれども、心の悲しさは涙となつて、止め度もなく瞼を溢れて、膝の上に落ちた。

娘の顫へる悲しい聲を聞いては、幸介の胸は切られるよりも慙かつた。けれども今五十圓の金を自分等父娘で何んとかしなければ、恩義ある新一に對して不義の奴とならねばならぬ。如何に貧すればとて、金の抵當に娘を奉公にまで出すと云ふことは、

父の情として忍びない。しかし、親子の私情は義理の重さには代へられない。――幸介も娘の心を呑み込んで、決心した。

「今此の有樣では五十圓はさて措き、私等の力では五圓の金も纏りさうもない――と云つて此の儘には濟まないことだから、お前さへ其の氣になつてくれゝば、和田さんにも御心配をかけずに濟む。――氣の毒だが何うぞさうしてくれ。」と、しよぼ〳〵と浮む涙の顏を見せまいとて、そつと燈火の明りに背けた、腮のあたりが淋しい。

「ではお父さん、承知して私を奉公に遣つて下さいますか。」

「親の口から濟まないことだが、長いことでもあるまいから辛抱して行つてくれ。其の内には屹度何んとか都合して借金を返すからの……」と、我が子ながら其の前に手を突いて賴まんばかりに云つた。

「お父さん、私、心は決めて居るのですから、どうぞ心配しないで遣つて下さい。」

「まあ好いやな――お父さんが承知してくれゝば俺も連れて行き好いと云ふものだ」と、氣嫌好く、「それにお父さん、お前の用事でもあつたら、近い處だ、何時

るが好いよ。」

「はい、有り難う存じます。奉公と申しましても何分初めてのことで御座いますから、どうぞ何分宜しく願ひます。」と、おろ〳〵聲で云ふ。

「好いとも！　萬事は俺が心得て居る。——何んだな、親子ともメソ〳〵泣いたりなどして、見つともねえぢやねえか。笑談ぢやねえ、さ、そんなに愚圖々々してないで早く行くとしようよ。」と、岩五郎は腰を浮かして急き立てるのであつた。

「ぢや、身體を大事にしての・・・・」と、幸介は泣顔を見せまいと闇に背けて、そつと涙を拭いた。

此の儘行く！　それはお妙に取つて堪へられないところであつた。せめて一目でも好い、戀しい新一に會つて、一言々葉を交した上にしたい。——斯うして居る中にも一刻も早く新一の歸れかしと心に祈つて、身輕く出掛けようとはしなかつた。

「おい〳〵、何時までのんべんぐらりとして居るんだ——好い加減にして來ねえ。」

新一は、家にさう云ふ事が起つて居ようとは夢にも知らなかつた。何う奔走して見ても金の調達は纏らないので、最後に節を屈して雄二郎に一時の融通を頼まうと楓川樓に訪ねて見ると、運の惡い時には惡いもので、散歩から歸つて見ると東京から來て居た電報に驚いて、一足違ひに歸京したと云ふ後であつた。——萬事休す！　最早や一縷の望みも絶え果てゝ何うする力もなく、重い足を引き摺るやうに、夕闇の道をトボ〳〵と歸つて來た。

「只今。」と、聲を掛けて闕を跨ぐと、其の姿を見たお妙は生き返つたやうな聲で、「オ、和田さん、私、先刻から待つて居ました。」と、其の短かい言葉に無量の思ひを籠めて云つた。——人眼がなければ其の肩に縋つて、胸に顔を埋めて思ふさま泣こうものを——。

新一は常ならぬお妙の其の氣勢に先づ胸は轟くのであつたが、其所に、岩五郎が立

つて居るので、お妙にはチラと眼をくれた丈で、

「あ、野々山さん、拜借のお金のことでお出で下すつたのですか。」

「當り前よ、期限が過ぎても何んの挨拶もねえから催促すれや、今晩までに間違ひなくだなんて、使ひの者を追ひ歸して了ふたあ酷いぢやねえか。」と、惡いところへ歸つて來たと思ひながら、ヂロリと新一の顏を横眼で睨めた。

新一は如何にも濟まなさゝうに頭を低くして、「實は期限を違えんようにと、いろいろ奔走したのですが、何分結果が思ふやうに行かないので、遂ひ失禮して居ました。實は只今も其の事で奔走して來たのですが、どうか今三四日のところを御猶豫願へますまいか。」

「猶豫は出來ねえよ。」と、岩五郎は膠もなく慳貪に退けて、「此處はお前の出る幕ぢやねえんだ。——今其の金が出來ねえから、姐さんが奉公に來ることに決つたんだ。」

「え、奉公に！」

「さうよ。」と、岩五郎は冷かに云つた。

「貴方には御相談しませんでしたけれども、今お父さんと相談して、私が奉公へ行ことにしました。——私さへ奉公に行けば無事に濟むんですから……」と、お妙の眼は咽び入つて、語尾は微かに消えて了つた。

「妙さん、貴女が奉公に……」と、新一は上づつたやうな聲で、殆んど叫ぶやうに云つて、慄へるお妙の姿を燒けるやうに熱した眼に見詰めた。

「私が奉公に參りませんと大變なことになるのですから、何うぞ奉公に遣つて下さい。」

新一は情けないと云ふやうな眼色をして、

「さう云ふことは斷じて出來ません！」と、命ずるやうに云つた。其の眼には涙さへ浮いて居た。

「妙さんを奉公に出すくらゐなら、僕はこんなことをしては可けません。」

岩五郎は嘲笑つて、「おい〳〵、邪魔なところへ出しや張りやがつて餘計なことを云ふな――奉公に出すのが厭なら金を積んでから物を言へ、本當に意氣地のねえ野郎だ。さあ、姐さん早く仕度をしねえ。」

新一の胸は、恥と、憤りとに煮えるやうに熱した。けれども、何んと返す可き言葉もない。「五十兩の金を積んでから物を言へ！」――其の五十兩の金がないばかりに此の辱めを受けて、而も愛する女を奪はれて行く！　若し玆に五十圓の金があつたなら、それが縱し明日の生命に拘るやうな金であらうとも、彼の面に投げ附けて立涙に口を利いて見せようものを――。燒けるやうに熱した眼にヂリ〳〵と睨んで、火のやうな熱い息を吹いた。

岩五郎は其の樣を尻眼に見て、冷かに笑つて、

「さ、早くしねえか。」と、お妙を急がし立てる。

「勘忍して下さい。」心の中で拜むやうに云つて、しほ〳〵と立上つた。新一の心持はお妙には十分わかつて居た。自分とても何も好き好んで行くのではない。新一と別

れて行くことは死ぬよりも愁い――其の死ぬより愁い思ひを忍んでまで行かうと云ふのは、新一の爲め――義理の爲めである。

「ではお父さん、私參りますから――和田さん、身體を大事にして……」と、涙に霞む眼にちつと新一を見た。

新一は、默つて石のやうに突つ立つて居た。

お妙は悲しくて遣る瀨なかつた。せめて一言――一言でも好いから何んとか優しい言葉をかけて貰ひたい。人目がなければ――人目がないならば犇と其の手を握つて、此の心の底の底まで打ち明けて訴へて、氣の晴れるまで泣いて〳〵泣き盡さうものを――けれども、岩五郎の獸のやうな二つの眼が光つて居るではないか！

今此の家を出て行けば、何時になつたら再び歸つて來られるやら――一年か、二年か――覺束ない。せめても母の位牌へ別れの線香を手向けようとて、佛壇の前に行つた。

偶と、小箱の傍の白い紙包みが、涙に濡れた眼に映つたので、何心なく取つて見る

と――「金百兩」と墨の痕鮮かに浮き出た――金包みではないか！

「あら！」と、思はずも驚きの聲を上げた。と、其の聲に驚いた新一も、岩五郎も其方に眼を向けた。

お妙は驚きと、怖れに打ち慄ふ胸を左の手に抑へて、「お父さん、お佛壇の前に何か置かなくつて？」

「何も置いた覺えはないがの。」

「ほんとに何うしたんだらう、此處にこんなにお金があるのですよ。」

「え？　お金が！」と、幸介は思はず伸び上つた。

「おい〳〵、笑談ぢやねえぞ――さう無暗に金が湧いて堪るものか。巫山戯なさんな、さあ早く出掛けよう。何時までも愚圖々々して居て切りがねえや！」と、忌々しさうに舌打ちして、ヅカ〳〵と座敷に上ると、無法にもお妙の柔らかな手をむづと掴んで引つ立てた。

先刻から一言も吐かなかつた新一は、此の時其の餘りの傍若無人の仕打ちに最う堪

らなくなつて、眉をピクリと動かしたが、

「こら、何をする！」と、岩五郎の手を拂つて、其の前に立つと、屹と肩を聳かした。

「何だと！　利いた風な眞似をしやがるな。金がねえ癖に何んの文句があるんでえ。」

と、大聲に罵つて、今にも掴みかゝらんず氣勢ひを示した。

新一は落附いた態度で、「金さへ返したら、妙さんは行かなくても好いだらうな。」

「當り前よ。金を返しさへすれや文句はねえや。だが其の金が出來ねえから連れて行くと云ふのだ。」

新一はお妙に向つて、「實は妙さんにも言はなかつたけれども、其のお金は友人から預つたのを、先刻出かけに其所へ一寸置いたんです。――何あに友人のものですから一寸の融通は構ひません。それで拂ひませう。」

「あの、之れで拂つても好んですか。」

「大夫丈です！」と力强く言つて、金包を受取るとバラリと封を切つた。

「さあ、耳を揃へて五十圓――確かに返したよ。」と、山吹色に光る金貨を五枚、ヅ

ラリと岩五郎の前に並べた。

「そんなら私、奉公に行かなくても好いんですか！」と、金の出所が腑に落ちないので、不安さうに眉を潜めながらも、嬉しさうに云つた。

「えゝ、好いどこちやない——金さへ返せば最う好んだから……」

「あゝお父さん！私奉公に行かなくても好んですつて！」と、初めてほつとした喜びの聲であつた。

「さうか、それで漸く私も安心した！」と、何も知らない幸介は、之れも胸の痞えが下りたやうに、急に晴れ〳〵した顏を見せた。

岩五郎は自分の前に並べられた金は受取らうともせず、先刻から新一の顏と包み紙とをヂロ〳〵と見比べて居たが、

「おい、一寸それを見せてくんな。」と、新一の手に有る包み紙を指した。

「金は其所に返してある。」

「金ぢやねえ、其の包み紙だ。」

「金さへ返したら、こんな物を見せる必要はない。」

「お前の方になくつたつて、俺の方にあるんだ。見せろと云つたら見せたつて好いぢやないか。」

さう言はれて新一も渡さないわけに行かなかつた。澁々渡すのを岩五郎は受取つて一眼見ると、

「おい、和田さん！　學校の先生をする傍ら盜人を內職にしてるのかね。」と、包紙を廣げてヂロリと新一の顏を見た。

新一はさつと顏色を變へた。

「失敬なことを仰有るな！」と、强く言つたけれども、顏の色は暗かつた。

「それぢや此の金は何所から持つて來たのだ！」

「うむ……友人から……」と、言葉が詰まる。

「ハヽヽヽそれぢやお前の友人は盜人かえ。」と、嘲笑つて、新一の混惑した顏を冷かに眺めたが、旋て調子を鋭く、「此の金はな、先刻俺れが他所から受取つた金だ

よ。――心覺えの爲めに包紙に自分の手で百圓と書いて、つい枕元へ置いといたんだ。――手前それを知つて、俺の留守へ行つて盜んで來たんだらう。」

「怪しからんことを――そんなことした覺えはない！」

「まあ好いや、出る所へ出て片を附けようぢやねえか――俺と一緒に警察署へ來い。學校の先生を拘引するなんて面白いや！」と、むづと新一の手を攫んだ。

新一はそれに抵抗する元氣もなかつた。

お妙も、幸介も、唯呆れるばかりで、口も利けなかつた。

「さあ、來やがれ！」と、喧嘩に勝ち誇つた獸のやうな態度で、躊躇ふ新一を引つ立てるのであつた。

其所へ富也は泣きながら飛び込んで來た。そして、行也岩五郎の手に縋つた。

「和田さんを連れて行つちや厭だ――僕が盜つたんです。其のお金は僕が盜つたんです。」

「え！　富ちやんが！」と、其の時までも口が利けないで居たお妙は、驚きの表情の

中にも情けないと云ふ眼付きをして、富也を屹と見た。

富也は涙聲で、「小父さん僕はね、今日七つ岩の處で和田さんがお金に困ると云ふし、お父さんも矢張りお金が無いから死んで了ふと云ふものだから、悲しくなつて、何うか其のお金が欲しい〳〵と思つて、道傍を氣を附けて見たけれども落ちて居ないもんだから、先刻お父さんのお供で小父さんのとこへ行つて、小父さんが療治をして眠つてる間に、枕のとこにあつたお金を持つて歸つたの――だから勘忍して下さい。」と、涙に滲む眼を手の甲で擦つて居た。

「富ちやん、それは本當かへ……」

「あゝ。」と、小さい頭で頷く。

「まあお前は何んと云ふ情けないことをしておくれだらう。お父さんや姉さんはどんなに困つて居ても、お前にそんな事をしてくれと敎へはしなかつたものを！」と泣く――其の涙には貧しい乍らも曲つたことを厭ふ淸廉の美しさと、分別のない弟を愛し憫れむ姉らしい情けの優しさとが含まれて居た。

「姉さん御免なさい……」と、素直に謝つて、「だつてね僕、お金がなくて和田さんが居なくなると姉さんが困るし、お父さんが死んで了へば僕悲しいものだから、それでお金を持つて來たんだけれども……」と、罪のないことを云つて——それでも惡いことをしたと悔い、詫るのであつた。

「お前、ほんとに情けないことをしておくれだねえ！　と、お妙は血を吐く思ひで云つて、富也の顏をつく〳〵眺めたが、堪らなくなつて、其の身體を犇と抱いた。——瞼に溢れる熱湯のやうな涙は、ホロ〳〵と弟の顏に、雨のやうにかゝつた。

「成程な——學校の先生だけあつて中々巧えや。子供が盗つたら罪にならねえと思つて、手前が盗むやうに言ひ付けて出したんだらう。悪圖々々云ふこたあねえ、金を出したのは手前ぢやあねえか。——さあ俺と一緒に來やがれ。」と、岩五郎は意地惡くせゝら笑つて、再び新一の腕を掴んだ。

「小父さん、僕が盗つたんだから、僕を連れて行つて下さい。」と、泣きながら富也は叫ぶ。

今迄で默然として俯向いて居た新一は、此の時何事をか決心したものゝやうに顏を上げた。はふり落つる涙を拂はうともせず、富也の小さな手を犇と握つて、

「富ちやん！　お前は和田さんを助けようと思つてそんな事を云つてくれるけれども、お前は何も知らないのだ。お金は此の和田さんが盗つたに違ひないのだから、お前はね、そんなことを言はないで、お父さんや姉さんの傍に居ておくれ！」と、云ひ終つて屹と唇を嚙んだ。——汚辱と、憤恨とに衰えるやうに湧き立つた胸も、云ひ切つて了つたら却つてすが〳〵しくなつた。縱令此の世では何うならうとも——人々には何んと思はれようとも、唯、自分の此の潔白な心は神が知つてくれる——何事も默して一切の責を我身一つに負うて行かう。

お妙は氣が氣ではなかつた。——驚きと、悲みとに精神が少し取り亂れたと云ふ風で、新一の袖を控へた。

「いゝえ、和田さん！　私には何事もよく分つて居ります。——弟の罪は私の罪ですから、私が參ります。」

「いや、私は老先のない身體だ――私が行く。」と、幸介もよろ〳〵と立ち上る。

新一は慘として面を背けた。

「皆さんに心配かけて濟みません。私が盗んだ本人ですから、私が參ります！」と、斷乎として云つて屹と唇を結んだ。潔く覺悟を決めた其の顏には、一點の曇りもないのであつた。

「あゝ、和田さん！」と、お妙は其處に泣き崩折れた。

「手前が盗んだのだから、手前が行くのは當り前だ。」と、岩五郎は新一の手を取つて引つ立てた。

そして、闕を跨いで未だ一歩も運ばぬ中に、闇に何者か黑い影が動くと見る間に躍つて、行也岩五郎の大きな身體を突き飛ばした。

岩五郎はよろ〳〵と蹌踉けたが漸く踏み止まつて、

「やい！　何んてえことをしやがるんでい！」と、聲高く怒鳴つたが、八分の怖れを成して、内から斜めに射す明りに、屍つと黑い影を透して見た。

新一も、富也も、お妙も、此の場の不思議な光景に、唯、呆れて眼を見張つた。

――墨染の衣を着た若僧は、闇の中にすつくと立つて、爛として輝く其の双の眼は鋭く岩五郎を睨んで居た。

「あゝ、先刻の坊さん！」と、富也は叫んだ。

「おゝ、兄さん！」と、お妙も思はず聲を上げた。

「默つて居れ！」と、力のある聲で――しかし靜かに制した。

「私が立替へて置きませう。」と、冷かに云つて、石のやうに突つ立つた岩五郎の眼の前に、百圓札を突き附けた。

岩五郎は不意のことに何が何やら分らなかつた。鼻面を折られて面喰つたやうな形であつたが、弱身を見せまいと、急に前に進み出て、「何だと！　そんな物が欲しくて云つてるんぢやねえや。百兩と云ふ金を盗んだ盗人を警察へ連れて行かうてえんだ！　傍から邪魔を入れないで、打つ捨つて置け！」

若い僧は物靜かに、「事情は先刻から皆聞いて居たが、如何にも氣の毒なことに思

つたから、私が立替へて上げるのだ。——借りた金は五十圓だと云ふことだが、それに百圓出すのだから、文句言はずに我慢したら好からう。」

「青坊主の癖に乙う利いた風な口を利くな——。」と、笑つて、「手前などの出る幕ぢやねんだ。餘計なことを言はないで引つ込んでろい！」

けれども若い僧は眉毛一筋動かさなかつた。唇のあたりに微かに笑みの影を浮べて

「決して餘計なことぢやない。——如何にも惡いことをしたには違ひないが、高が子供のしたことだ。大抵にして勘辨したら好からう。」

「子供のしたことか、大人のしたことか分らねえ奴があるものか——和田が言ひ付けたに違ひねえんだ。」

「隨分諄いな。之れ程云ふのに未だ分らんと云ふのは、餘り大人氣ない！」と、憐れむやうに岩五郎の顏を眺めたが、又、思ひ返したと云ふ風で、

「まあ、さう言はんで勘辨して遣つて貰ひたい——。御承知ないかの？」と、其の言葉は穩かであつたけれども、返答に依つては考へがあると云ふやうな決心の色を面に見

せて、一足前へ詰め寄つた。

ぱつと明りに照らされた其の顏を、岩五郎は正面からつく〴〵眺めて、吃驚した色をした。

「おい、久し振りだな。」と、しかし聲は落附いて云つた。

「誰方でしたか？」と、訝しさうに眉を寄せた。

「分らねえか——お前も餘程耄碌したものだな。」

「何處かでお目にかゝつたことでもあつたかな？」

「分らなけれや云つて遣らあ——。それ、宇都の宮在の短銃一件の時よ。」と、相手が定めて吃驚するだらうと、北叟笑んで注視めた。

若い僧はそれで漸く思ひ出した。あの時新藏の死骸に火をかけて、氣を失つて殆んど死んだやうになつて居る文子を抱いて逃げるところを呼び止めた男があつた。——面倒と聲もかけずに突き倒して無事に落ち延びたが、其の男が此の野々山岩五郎つたのか！

「成程、あの時出逢つた人が貴方であつたかな――それはお久振りであつた！」

若い僧が餘り落着き拂つて居るので、岩五郎は少し拍子抜けの氣味で、暫くは唯ま〴〵と徒らに相手の顔を見るのみであつた。――けれども若い僧は、何時までも空嘯いて居た。

「あの時は大した仕事をしたな。――五萬圓だぜ。五萬圓と云ふ仕事に僅か之れつきりかへ？　半分にしたつて二萬五千圓だよ。最う少し何んとか色を附けて貰はうぢやねえか。」と、岩五郎はヂリ〴〵と焦れて、悽味に出た。

若い僧は唇のあたりに冷たい嘲りの色を見せて、「それぢや、あの時のことを知つとるから、之れだけぢや濟まされんと云ふのか！」

「當り前よ。」

若い僧はせゝら笑つた。

「貴樣も餘つ程眼先の見えねえ野郎だな。それで此の俺を威す氣か！　笑はかすな い！」と、相手を見据ゑて、「あの時のことを知つとるなら何も隱す必要はない。貴樣

の方で言へなければ俺の方で云つて遣らあ。――如何にも俺は人殺をして五萬圓の金を強奪した。あの家へ火をつけた。――それが何うしたんだ！　貴樣などに分前を強請られるやうな弱い尻はないんだ。成程俺は惡黨だ！　さう云ふ貴樣も餘り惡黨でないこともあるまい。けれども、同じ惡黨でも貴樣と俺とでは大分段が違ふぞ。其の段違ひの貴樣が俺を強迫して金を取らうなんて、片腹痛いや。しかし、さう云ふことを言ひ出すからには、貴樣も何か覺悟があるのだらう。面白い。相手になつて遣らう。――どうせ俺は人殺しの罪人だ。一人殺すも、二人殺すも同じことだ。」

岩五郎は懷中から白鞘の短刀を嚇すやうにチラと見せた。

「乙な眞似をするな。女子供でなくちやそんな物には怖がらないや。」と冷笑して、「だが、貴樣もさう云ふ物を見せた以上は、男として只引つ込ますわけにも行くまい。俺の生命を取るか、貴樣の生命を捨てるか――どつからでも都合の好い方から遣つて來い。」と、笠を捨てゝ衣の袖を卷ると、ヂリ〴〵と詰め寄つた。

其の俺くまで度胸の据つた態度に、岩五郎は少し恐氣附いて、尻込みした。

「成程手前は大したもんだ。――それぢや俺が之れ程云つても出すのは厭か。」

「厭だとも！」

「厭なら止めろ――手前も出さねえと云つたら出すまい。無理に取らうとは言はねえや。それで好いぢやねえか。まあ茲は何も言はずに、お互に男らしく器用に別れようよ。」と、短刀を引つ込めた。

「先づ其の方が貴様の爲めには利益だらうて！」と頷いて、「しかし、一端言ひ出して置いて此の儘にするのも殘念だらう。さうかと云つて一人と一人では手出しも出來まい――口惜しいなら之れから警察へ行つて、俺が此處に居ることを密告して來い。それが貴様の俺に對する腹癒せには一番安全な手段だ。」

岩五郎は其の圖々しい言ひ草に、内心舌を卷いて、

「笑はかすな――未だ警察の手を借りてまで、手前の始末を附けようたあ言はねえや、器用に別れようと云つたら、それで好いぢやねえか。しかし手前も男だ。今度會ふ時は男らしく會つてくれ！　頼さあ。」と、百兩の金を懷中に入れて、「ぢや折角だ、之れだ

けは貰つて置くよ。」

「それを受取つたら、證書だけは置いて行け。」

岩五郎は苦笑ひして、「違えねえ、金は手前から出たんだな――ぢや返して遣らあ……おい、之れが證文だよ。」と、忌々しさうに證文を渡した。

若い僧はそれに一通り眼を通すと、ビリ〳〵と引裂いて了つた。

「手前は之れで最う用はないのだから、早く歸れ！」

「居れと云つたつて歸らあな。」と、面憎さうに云つて、先刻から驚きと、怖れとに慄へて居る幸介に向つて、

「おい、お父さん、今聞いて居る通りあの坊主から百兩と云ふ大金が出たんだ。之れで和田の盗人一件は勘辨して遣らあ。だがな、此の坊主は惡黨なんだぜ。人殺しをして、火をつけて、五萬圓の金を盗んだ大盗賊なんだ！」

「貴様、今男らしく何も言はずに別れようと云つたぢやねえか。――餘計なことを言はねえで、さつさと歸れ！」

「歸るとも――ちや又何時か會はうぜ！」と、口惜しさうに若い僧を睨んで、出て行つた。

「口程にもねえ、腰のねえ野郎だ！」と、若僧は其の後を見送つて、吐き出すやうに獨言をいつた。

第六章

長い間思ひ思つて其の歸りを待つた兄が、偶々歸つて來て嬉しいと思ふも束の間、聞くも恐ろしい人殺しの重罪人であつた。現在血肉を分けた妹の身としては、恐ろしいと、情けないとに心の置き場もなかつた。

「兄さん！」と、今まで堪へて居たお妙は、兄の傍に駈け寄つて犇と其胸に縋つた。

「おゝ、お妙！　久し振りであつたなあ。」と、言葉は少ないが無量の想ひを籠めて優しく云つて、暗然として涙を呑んだ。

暫くの間は人々の間に一言の聲もなく、獨り蚊遣火の煙ばかりが薄暗がりに仄かに漂うて、朝夕の冷氣に漸く衰へた蚊の幽かな羽音が、佗しく聞えて居た。

「東吾、お前はな……」顔や姿こそ見えぬけれども、話の樣子で我が子と早くも察した幸介は、漸う〳〵之れだけ云つたが、悲喜交々胸に迫ると云つた風で、後は涙に咽んで何も言へなかつた。

「お父さん！」と、流石に東吾の聲も顫へた。「先程は折角お目にかゝり乍ら、悲しいことには何分世を忍ぶ身の上で、名乘ることも出來ずに名殘り惜しいお別れをいたしましたが、別れてから後も御身の上が案じられてなりませんので、實は先刻から家の樣子を覗つて居りましたところが、只今のやうな場合故、思はずも立入りました。斯うなつた上は其の後の事に就きましても、いろ〳〵申上たいことも御座いますから、兎に角其所へ上らして貰ひます。」と、上框に腰を下して、草鞋を脱いだ。お妙の甲斐甲斐しく汲んでくれた洗足湯に足を洗つて、眼の見えぬ父の前に坐ると、ヒタと兩手を突いた。

「お父さん、一別以來御壯健で何よりで御座います。」

「これ、東吾！　久し振りで歸つて來て好いことでも聞かせることか、聞くも恐ろしい人殺しの大罪を犯したなどゝ――貴樣のやうな親不孝者はないぞ！」と、怒りに顫へる聲に強くは云つたけれども、聲を落して嘆息するやうに、「けれどもな、貴樣のやうな奴でも現在血を分けた子だと思へばこそ心にかゝる――一層死んでゃもくれたなら家の者も亦諦めがつく。愁ひ會つたゃけ苦勞もすれば心も痛めるのだ。俺は此の年になつて生甲斐のない片輪の生命を長らへて、死ぬよりも苦しい思ひをせねばならぬ。お前のやうな奴に何時までも此處に居られては、世間樣へ對して申譯がない。さ、たつた今出て行つてくれ。」年は取つても正直一徹の幸介は斷乎として云つた。けれども其の眼からホロ〳〵と滾れる涙には、親の慈悲と愛とが輝いて居るやうに見えた。

「御立腹は重々御尤もで御座います。何んと申譯の仕樣も御座いません。――尤も、貴方が此處へ置いてやると仰言つたつて、私は斯うして居られない身の上なのです。直ぐにも立つて行かねばなりません。けれどもお父さん！　何うぞ私を信じて下さい。

成程私は人殺しの大罪人です。しかし、今では最うすつかり改心して、以前の惡人の東吾ではありません。さう云つたゃけでは御信用もありますまいが、實は斯う云ふわけです。」と、一膝進めて、「家を飛び出してから全六年の間と云ふもの方々を歩きまして、恰度一ヶ月ばかり前に廻り廻つて來たのが宇都宮在です。其所に人鬼に等しい利貸があつて良民を苦めると云ふことを聞いて、或夜其の家へ押入つて一發の短銃の下に其の爺を打ち殺しました。金庫に呻る金が欲しい爲めに、さう云ふ大罪を犯したのです。ところが其の爺が死際に、何んと私に言つたとお思ひになります。

幸介も、お妙も、新一も、言葉はなくて、只、恐れに顫へるやうな眼に、東吾の顏を眤と見詰めて居た。

彼れは猶ほ語りつゃけた。「此の老人も元からそんな人間ではなかつたのです。それが强慾非道な人鬼のやうな高利貸とまで變つたには深い理由のあることで、苦しい息の下に老人の語つたところに依ると、二十年前に其の妻が姦夫と共に一人の子息を連れて遁げ去つてからと云ふものは、世の中を恨み、呪ふやうな心になつて、世間の人

間を皆敵にしたのです。そして、金で人を酷めることを無上の樂みにして、喰ふものも食はぬようにして、人に恨まれ、嘲られ乍ら貯めた金が五萬圓――其の金をすつかり私の前に出して、此の半額はお前に遣る。殘りの半分は幼少の時に別れた伜を尋ね當てゝ、お前の手から渡してくれと頼むのです。――世間の奴等を苦しめ、鬼のやうに憎まれ乍ら之れだけの金を貯めたのも、皆其の子息に遣りたいばかりだ……。お父さん！　私はそれを聞いた時には實に何んとも言へぬ感じに打たれて、身慄ひしました。親が子を思ふ慈悲、情けと云ふものは、こんなにまで深いものか！　さう思ふと私のやうな惡人でも、其の時初めて親の有難さが胸にひし〳〵迫つて、居ても立つても居られぬやうな心持がしました。」と、ホロ〳〵滾れる熱い涙を拭つて、「老人は私の身まで案じて、私の手から短銃を奪つて我れと我が脾腹に當てゝ自殺の態に見せて、其の儘息は絶えて了ひました。恐らく世の中に强盜をし、人殺しをする人間程憎んでも慊りなく、又信用の出來ない人間がありませうか。其の私に向つて最後の大事を托し、後々の身の上まで案じてくれる。私は其の時初めて人情の美しさを感じました。

そして、十年の長い間の迷ひの夢も醒め果てゝ、それから幸ひ眞人間の心持になりました。その老人の純潔な心に報いる道は、唯、其の子息を尋ね當て、五萬圓の金を渡すより外はない。私は死んで行く老人に、屹度其の事を誓ひました。それから今迄ににだつて、良心の苛責に苦められて、自殺をしようか、自首して出ようかと、幾度び心の動いたことがありませう。けれども一旦死人に誓つた義は重い。其の事を果すまでは、自分の生命が自分の物でない。首尾好く其の子息と云ふ人に廻り會うて金を渡すことさへ出來れば、私は直ぐ其の場にも自殺して老人に謝罪の覺悟です。其の役目を果した時が、私の生命の終る時です。此處でお別れ申せば、生きて再びお目にかかることは出來ますまい。今迄でさん〳〵不孝を重ねて、其の罪を取り返すどころか又こんな嘆きをかけて、お父さんには實に濟みません。お妙にも、富也にも苦勞をさせる――それも是れも皆私の罪だ。何うぞ此の東吾は初めから居なかつた奴だと諦めて、せめても死人に對する義を立てさして下さい。草に伏し、地を潜つても其の子息に會つて金を渡さねば、私は死んでも死に切れない身の上なのです。」

長々と語る東吾の言葉を、幸介は愁然として聞いて居たが、やがて、「オヽ、好い覺悟だ。お前の採る可き道は全くそれより外にない。親子の間のことは私のことだ。死人に誓つたことは義だ。私のことは棄てゝも義に就くのが男だ。私は何も言はぬから今の決心を曲げないで立派に遣つてくれ！」

「お父さん、有難う御座います。」

「兄さん！」

「兄さん！」お妙と、富也とは、兩方から涙聲に呼んだ。

「おゝ、お妙！　富也！　兄さんが惡いばかりに苦勞をさせるなあ。勘忍してくれ！」

と、東吾は一語無量の思ひを籠めて、兩方から縋り附く手を幸と握つたのである。

一室には咽び泣きの聲が洩れて、勝手の流元に鳴く蟋蟀の音が淋しく聞えた。

今迄で默つて耳を傾けて、何事をか深く沈思して居た新一は、此の時東吾の方に膝を進めて、「初めてお目にかゝります。私は和田新一と云ふ者ですが、以後は何うぞ御別懇に願ひます。」

「申し後れました。私がお妙の兄の東吾です。貴方のことは先刻弟から聞き及びましたが、一同の者がいろ〳〵御厄介になりまして、何んと御禮の言葉もありません。」

「いや、私こそいろ〳〵御世話になつて居ります。」と丁寧に會釋したが、言葉を改めて、「時に、今貴方のお話で御身の上のことは蔭ながら承りましたが、それに就て一寸お伺ひ申したいことがあるのですが、お腹藏なく打開けて下さいますでせうか。」

「元より只今申しましたやうな次第で、覺悟いたして居る身で御座いますから、何んなりと申し上げます。」

「唐突なお尋ねで甚だ失禮ですが、其の宇都宮在の高利貸を短銃を以て殺害したと仰言つたのは、事實ですか。」

「誠に濟まんことをしました。」

「全く事實ですか。」

「事實です。」

「其の高利貸の名は何んと云つたか、御存知ありませんでせうか。」何事をか恐ろしい

ものに觸れるやうに其の聲は慄へて、不安な色に輝いた眼は、眤と東吾を見詰めた。

「知つて居ますとも——桑村新藏。」

「え！　桑村新藏！」と、思はず高まつた聲で鸚鵡返しに云つた。自分の父を——夢の間も忘れることが出來ないで、思ひ思つた父を殺したのが、此の東吾であつたのか！　何んと云ふ運命の慘酷か！　自分の父の敵が、自分の最愛の女の兄であつたのか！

なる惡戲！　新一の身體の顫へは暫く止まらなかつた。

東吾は、新一の異樣な叫び聲と、其の表情を訝しさうに眺めて、「貴方は、あの老人を知つて居るのですか。」

知つて居るどころか、現在血を分けた自分の父ではないか——けれども、新一の心は咄嗟の間に平靜になつた。

「いや、知つとると云ふわけではありません。」と、ハツキリ答へて、「妙なことを重ねて伺ひますが、其の際老人の言葉に翻然悔悟したと仰言いましたのも、事實で御座いますか。」

「全く悔悟いたしました。尤も、餘り意外な事柄ですから御信用ないかも知れませんが、托された遺產五萬圓は、今日迄は如何なる場合にも一厘一毛も手は附けずに、常に肌身離さず持つて居りましたが、只今の場合、已むを得ず百圓だけ不足を告げました。」

「して、其の老人の子息を探し當てゝ、金を渡すと同時に、自殺して謝罪すると仰言つたのも、全く其のお覺悟ですか。」

「勿論其の決心です。其の人に會ふまでは如何なる艱難を忍んでも生命を全ふせねばなりませんが、金を渡しさへすれば、私の生きて居る役目は濟みます。其の上は潔く自殺して謝罪しなければ、私の良心が許しません。」

「確かに？」

「え、確かに！」

「いや、實に好いお覺悟です。」と、腕を組んで太息した。

「有難う御座います。」

さう云つて東吾は、默然として二人の會話に耳を傾けて居た幸介に向つて、「それではお父さん、斯うして居る間も心急がれますから、私は之れでお暇申します。何うぞお身體をお大事に、長生きして下さいまし。」

「あゝ。――義理を棄てるなよ。」

「えゝ。」

「兄さん、最う行くのですか。」お妙は涙にべつとり濡れた顔を上げた。

「あゝ、最う出かける。お前にもいろ〳〵苦勞をかけて濟まん。之れからも今迄のやうに、どうぞ兄さんと二人前分お父さんの面倒を見て上げてくれ。」と、立上つたが、晝の疲れに何時の間にか其の儘其所へ假寢のかすかな寢息を立てゝ居る富也の無邪氣な寢顏を、つく〴〵と眺めて「富也はよく眠つてるな。――罪のないものだ。」と、ホロリと一滴、床の上に落ちた。

「兄さん、起しませうか。」

「よし〳〵、其の儘にしてお置き。――富、勘忍してくれ、兄さんは最う行くのだよ、

今此處で別れゝば、再び會へるか何うかも分らない。何うか、兄さんと二人分孝行してくれ。生れ變つた今度の世には、先刻欲しいと云つた鞄も、本も買つて遣るよ。」

第七章

初秋の夜は稍々更けて、晴れ渡つた空は水のやうに青く澄んだ。八日ばかりの西に傾いた月の薄白い光りが、黑々と茂つた杉の樹立を洩れて、宛ら縞目を織出したやうに地に落ちた。遙に箒川の流れの瀨音が冷たく冴えて聞えて、叢に鳴き頻る名も知らぬ蟲の、秋を悲しむやうな其の音が、靜かな四邊に降るやうに繁く聞える。

其所へ、樹立の下を潛つて、力なく歩いて來たのは若い男と、女とであつた。其かすかな足音にも、蟲の音はヒタと止まるが、直ぐ其後から〳〵と、恰も追つかけるやうに鳴き頻る。ハラ〳〵と梢を洩れる月光が二人の顏に降り注いで、凄い程蒼白い。

男女のノロ〳〵とした足どりは、淡々しい月下にボンヤリと浮んで見える一軒家の、

裏手の小窓を洩れてチラ〳〵と瞬く燈火の光りを近々と見ると、言ひ合したやうにヒタと止まつて了つた。

「和田さん。私、先刻からあんなに言つてるのに、何故默つてゝ返事して下さらないのです。——貴方、怒つて居らつしやるの？」と、男の横顔を覗くやうにして、眦つと眺めた。

「……」

「兄さんがあんな人だから、私がお厭になりましたの？」

「……」

「富ちやんがあゝ云ふ恥しいことをしてくれたので、貴方のお名前に拘はつたから、それで私を捨てゝお了ひなさるの。」

「……」男は猶も口を利かうとしない。しつかと腕を胸の上に組んで、棒のやうに立つて眼を瞑つたまゝ、身動きもしなかつた。

「和田さん、何うなすつたの？　私がこんなに言つてるのに、何か仰言つて下さいよ。」

と、怨ずるやうに云つたが、情けなさゝうにほつと太息を吐いて、一寸仰いだ。恨みと、媚びと、情しとを含んだ其の處女の瞳には言はれつて、蒼い月の光を浴びた、ふつくらと肉附いた頰は、匂ふばかりに美しかつた。

男は、女の其の姿を憐れむやうな、又、悲しむやうな眼色に眦と見て居たが、暫くして重々しい調子で口を開いた。

「妙さん、諦めようぢやありませんか——此の儘綺麗に諦めませう。」

「諦めるつて……何うするの？」と、女は其の言葉の意味がよく腑に落ちないやうに首を傾げた。

「今夜此所で別れて了ひませう。」ハツキリと云つたけれども、其の聲はかすかに顫へて居た。

「え？　別れるのですつて！」と、初めて其の意味を呑み込んで、思はずも驚きの聲の高まつたのを、ハツと氣附いて、「あの、私と貴方とが……。」

「えゝ、二人が別れるのです。それより外に仕方はない。」

「貴方は何故そんな事を仰言るの……？」と云つた女の其の顔は眞蒼であつた。唇もブル〳〵と顫へて居た。

「譯は聞かないで下さい。」絶望的にキッパリ云つた男は、口を噤むと同時に屹と唇を嚙んだ。もだ〳〵する胸の苦しさに堪へぬものゝやうに、切なさうな息遣ひをして、其の邊を重い歩調で歩くのであつた。

女は失神したものゝやうに衝つ立つたまゝ、恰かも石で刻んだやうな動かぬ表情をして。乾いたやうな眼に男の姿を追つて居た。

「私、譯も聞かないで別れることは厭です。」と、突然ヒステリックな聲で叫ぶやうに云つて、急に其の眼からは熱い涙が止め度もなくボロ〳〵と湧いて、キリ〳〵と齒を嚙んで土の上にバッタリ倒れると、其の儘其處に泣き入つた。込み上げ〳〵て來る泣く音を屹と唇に嚙んで、脾腹のあたりから肩にかけて波打つやうに搖れた。少し〳〵づれた銀杏返の髷の根が、ブル〳〵と顫へるのが、月の光りにもそれと明らかに見られた。

男は、其の有樣に吃驚して傍に蹲まると、女の背に優しく手を置いた。

「妙さん、私を怨まないで下さい。貴女にも今日までいろ〳〵世話になつた。――世話になつたばかりぢやない、夫婦同樣に仲好く暮して來たのだけれども、慘酷な運命は今夜二人の間を割いたのだ。ね、さう思つて何も言はずに別れて下さい。」

「……」女は何も云ふことが出來なかつた。抑へようとして抑へることの出來ない忍び泣きの音がかすかに唇を洩れて、男の耳には錐を揉み立てられるよりも、切なかつた。

男は宥めるやうに又賺すやうに、言葉を重ねるのであつた。「世間では二人の間は夫婦の關係でもあるやうに云つて居るけれども、お互ひに今迄で純潔を保つて來たのは本だしも幸福でした。此所で此の儘別れても、少しも疚しいところはない。何事も運命です。今日まで二人仲好く暮して來たのを、せめて一生の樂しい思ひ出として回顧しませう。」

と、其の調子は優しく、しんみりとして居つた。

お妙は漸う〳〵、顔を上げて、「和田さん、何うして二人は別れなければならないのですか――其の譯を私に聞かして下さい。私、それを聞かない中は、どんな事をしても別れることは厭です。」ハラリとこぼれる後れ毛をを口に銜へると、フツツリと嚙み切つて、眼は怪しいまでに輝いて居た。

男は暫く考へて居た。――やがて思ひ切つたと云ふ風で、

「妙さん、それぢや言ひませう。――驚いちや可けませんよ、貴方と私とは敵同士なのです。」

「え、敵同士！」

「貴方の兄さんは私の敵だ！　先刻兄さんが話された、短銃で打ち殺した宇都宮在の高利貸桑村新藏と云ふのは、血を分けた私の實の父です。」

「え！」

餘りの意外に、急には信じられぬやうに、新一の顔をまぢ〳〵と見詰めた。

「私の父を殺したのは貴方の兄さんだ！　私と貴方の兄さんとは敵同士なのだ。其の

妹が貴方だ。」

「よく分りました。別れませう。」と、彈かれたやうに云つたが、「先刻兄の話した其の殺した人の子と云ふのは、和田さん、貴方のことでしたか――それでは、私、斯うしては居られません、――私兄に……」と、お妙は氣も狂はしく眼の色を變へて、よろ〳〵と立ち上つた。

新一は二足三足馳け出すお妙の袂をしつかと抑へて、

「妙さん、何處へ行くのです。」

「私、之れから兄を追つかけて知らさねばなりません。」

「まあ待つて下さい。」

「いゝえ、其處を離して……心が急かれます。未だ遠くへは行きますまい。」と身を畑く。

「兄さんに知らせる必要はありません。」

「それでも兄は貴方に會ひたいばかりに――會つてお詫をしたいばかりに、あゝして

苦勞してるぢやありませんか。」

「妙さん、それを知らせるくらゐなら、私は何もこんなに心は痛めません。――兄さんは何んと言ひました。私に會つて遺産を渡した上は、自殺して謝罪する覺悟だと云つたぢやありませんか……。私が桑村の子息だと分つた以上、兄さんの命はないのですぜ。兄を殺すのが妹の情か、長らへさせるのが妹の實か――。よく考へて見たら好いでせう。」

「あゝ、私、何うしたら好いのでせう。」と、崩折れるやうに云つた。

「まあ、私の云ふことを靜かに聞いて下さい。」と、優しく宥めて、漸う〳〵其所の切株に腰を下させた。

「妙さん、私一個の私情から言へば貴方の兄さんが憎い。先刻話を聞いた時には、私は飛びかゝつて刺し殺さうとまで思つた。けれども、よく話を聞いて見ると、兄さんは父が臨終の一言に依つて翻然として悔悟し、一諾の義を重んじて雲を掴むやうな私の行衛を飽まで尋ねようと云ふ、世にも稀れな義俠家ではありませんか！　敵とは云

ひながら私は其の義に堅い兄さんの心に感謝せずには居られません。而も今は二人の危急な場合を救つて貰つた大恩人です。そればかりではない、兄さんの罪も父が臨終の際に於て既に快く赦されて居るのだ。して見れば私には恩こそあれ、其の人を責める怨みは少しもないのです。私が名乘れば兄さんが死ぬ――兄さんを殺しては私の義が立たぬ。けれども、罪は赦されたにしろ、恩はあるにしろ、私の父を現在手にかけて殺した人は兄さんであつて見れば、事實に於て兄さんは私の敵なのだ。そして、妙さんは敵の妹だ。其の妙さんと結婚しては私の孝道が立たない。義と、孝と、戀と、此の三つの枷を解くには、何うしても妙さんを諦めるより外はない。諦められなくとも諦めねばならぬ。私は親に對する道の爲には貴方を娶ることが出來ず、貴方は兄さんの爲めに私へ嫁することが出來ず、互ひに想ひ想はれた一筋の水の流れが、孝と義との大きな岩に堰かれて右と左に別れ〳〵て幾千里――別れた水は又相逢ふことがあつても、私と貴方とは再び一緒になる時はありません。潔く諦めませう。妙さん、私の云ふことをよく聞分けて、貴方も何うぞ諦めて下さい。」と、新一は絞るやうな苦し

い調子で云つて、わけもなく足下の草の葉を、イラ〳〵しく拐つては投げ〳〵して居た。

お妙は其の白く細い襟元を項垂れて居たが、此の時顔を擡げてホッと儚なげな太息を吐いた。血の氣を失つて氷のやうに冷たく見える顔の色は、月の光りを受けて悽い程蒼い。涙は最う乾いて了つて固い決心を見せた眼の色は、却つて爽やかに輝いた。

「よく分りました。そんなことゝは少しも知ないで、今の今迄で我儘を言つて……何うぞ勘忍して下さい。」と、調子を落して、「ほんにさうですわね。貴方に取つては私は敵の妹ですもの——それが分つて見れば、私は……私は……たとへ焦れ死に死んだつて……」と、聲が咽んで、「貴方と一緒にはなれません！」投げるやうに云つて、動々もすれば瞼に溢れて來る未練の涙を、凝つと抑へた。

「妙さん、最う何も言はないで下さい。——貴女にさう言はれると、私の胸は裂かれるよりも苦しい。」衝と立つて月光に蒼く照らされた女の顔を凝つと見入つたが、やがて其の肩に優しく手を置いて、「斯うして貴女の顔を見るのも、親しく言葉を交すのも

今夜が最後だ。あゝ往事茫々夢の如し——之れから互ひに夢で樂みませう。何うぞ妙さん！／此の鹽原の溪川の流れの音を聞きながら、睦じく暮した今迄でのことを夢見たら、世界の中の何處の涯にか、未だ和田新一は生きてるものと思ひ出して下さいね。」

「和田さん、夢の中には親子の義理も、兄妹の義理もないのですねえ。——夢で貴方に會ふのなら、誰も何んとも言ひますまい。私、今此所で貴方と別れましても、毎晩夢で會ふのを樂みにして、生きて居ります。——哀れな私のことも思つて、何うぞせめては夢の中に來て下さい。」

「妙さん、よく言つてくれました！」

「和田さん！」

どちらからともなく二人の手と手は互に固と握られて、暫くは言葉もなかつた。

「何時迄も名殘りは盡きません。——潔く別れませう。」と、男は思ひ切りよくつゝと手を離して、「身體を大事にね。——眼の惡いお父さんや、年の行かない富ちやんの面倒を見て上げて下さい。」

「貴方もね……。」とそれだけで、言ひたいことは一ぱい溢れながら、胸が迫つて後は言へなかつた。

「妙さん！」

「え。」

男は振り仰ぐ女の蒼醒めた顔を、可憐しさうに見詰めた。——四つの眼と眼は、仄かな夜の闇の中に、燃えるやうに輝いた。

「妙さん！　儚ない戀でしたねえ。」と、佗し氣に云つて、顔を背けた。

「ほんとに……」と、女は其の言葉に又涙を誘はれて、男の胸に顔を埋めた。男は、其の戰くやうに慄へる鬢の毛を、優しく撫でゝ居た。

其の邊に鳴き頻つて居た蟲の音も、何時の間にか鳴き止んで、今は西の山に沈まうとして居る仄かな月明りは、匂ふやうに、煙るやうに二人を包んだ。

「ではお別れします。」

男は最う一度女の手を力を籠めて握つたが、つと身體を退いた。そして、二三歩歩き出した。

「和田さん。」

「え。」

「お大事にね……」

「貴女も！」と、すた〳〵と大跨に歩いて行つた。

お妙は石のやうに固く突つ立つて、眤と見送つて居た。眼には涙が浮いて、男の後姿は何時かぼうつと見えなくなつた。

「和田さん！」

斯う呼んで見たが、ひつそりとして何んの答へもなかつた。自分の聲が耳に返つて來て、言ひ樣もなく淋しい。——たつた一人、青い湖の底に立つて居るやうな氣がした。そして、お妙は崩折れるやうにべつたり其處の冷たい土の上にへたばつて、動く氣力もなかつた。何時までも〳〵じつとして居るのであつた。

一旦鳴き止んだ蟲は、月が落ちると共に又鳴き頻つて、お妙の膝近くでも鳴いた。

夜は次第に更けた。月の落ちた空は悽いやうな蒼さに冴えて、何處からともなく取り止めもなく、そよ〳〵吹いて來る秋口の風は、カサ〳〵と木の葉を鳴らして、死んだやうなお妙の姿を吹いて、何處ともなく通つて行つた。

第八章

鹽原の山中には淋しい冬が襲うて來た。高い嶺々の頂には眞白い雪を被つて、葉のすつかり落ち盡して赤裸になつた木々の梢から梢と、餌に饑ゑた渡り鳥が悲し氣な聲に鳴いて飛び歩く。――其の聲が、佗しい、長い冬を思はせて、人々に冬籠りの仕度を忙がせた。

坂卷の家では、幸介は重い病の床に横はる身であつた。口では立派に見切りを附けたとは云つて居たやうなものゝ、心ではそれでも萬一の望みを繋いで頼りにして居た長男の東吾が、人殺しの重罪を犯した身であると云ふことが分ると同時に、お妙の婿

とまで決つて居た新一は、何う云ふ事情があつてか、飄然として姿を隱して了つて其の後の消息は杳として分らない。氣は張つて居るやうなものゝ、最う年が年である。それからと云ふものは滅切り元氣が衰へて、立居さへも懶げに見えたが、何時からともなくブラ〳〵病み附いて、今では枕も上らぬ大病人となつた。年老いた身に、此の春の大病の後とは言ひ、殊に寒さに向つての患ひなので、到底本復は覺束ないらしい。

唯さへ貧しいところへ持つて來て、此の大病人を抱へたお妙は、何うして好いか分らなかつた。富也が手助けになるとは云ふものゝ、未だ頑是のない子供のことである。内のこと、外のこと――總べてのことを一身に引受けて働かねばならなかつた。身を粉にして働くけれども、女の細腕では、到底三人の口を糊する料の心配から、藥の手當病人の介抱と――さうは手が盡せない。僅かに湯なり、粥なりに口を濡らして、辛くも其の日を送つて居るのであつた。

新一が行つて了つてからは、お妙も物思ひの多い身となつた。心も樂まねば、氣も進まない。けれども自分が働かねば一家が立行かないばかりでなく、三人の者が乾干

しになつて了はねばならぬので、懶い心を鞭打つて絶え間もなく身體を動かして居るやうなものゝ、心は常に新一の上を思ひ詰めて居た。――新一と共に暮した日の嬉しかつたこと、樂しかつたことが頻りなく頭に浮んで、其の樂しい時代がまざ〳〵と眼に浮んで、思はずも和つと微笑むことがあるかと思ふと、偶と今の自分は最う其の時代を顧みて居るに過ぎない、淋しい身の上であることに氣が附いて、恰かも暗い十の中に一生を入れられたやうな、慘ない、悲しい氣持になる。

それにしてもあの月夜の晩の別れは、如何に愁く、悲しかつたか――悲しい運命の星の下に生れた、不幸な身と思ひ締めては見るやうなものゝ、何うしても忘れることの出來ない此の心を何うしたら好からう。寢ても、醒めても新一のことをのみ思ひ夢みて、胸苦しい日のみ送つた。そして、其の美しい若やかな顏も日に〳〵憔悴れて、ふくやかに肉附いた頰も削げ、顏色も蒼醒めて來た。

二三日前から急に嚴しくなつた寒さが、病み衰へた幸介の身には、ぐつと堪へて、容體は又急に惡くなつた。絶え間もなく襲つて來る咳と發熱とに、息も絶え〳〵に苦し

んで居る。

今夜は殊に惡かつた。お妙も、富也も、宵の口から病人の枕元に坐つたきりで、誠心籠めた介抱に手を盡して居る。外には嶺を吹き渡る風の音がヒュー〳〵と物悽く鳴つて、何處からともなく隙間洩れて忍び込む氷のやうな風は、二分心のラムプのかすかな炎を搖りはためかして、其の度に病人の顏は、暗く、土色に見える。

「富ちやん、姉さんが起きてるからね、お前は最うお寢みよ。」

お妙は、子供のことなれば流石に眠さうな眼を、澁々さして居る富也を、いたはつて云つた。

「僕、未だ眠くはないの。」と、ハツキリした眼をする。

少し病苦の薄らぎの合間にある病人は、骨と皮ばかりのやうに痩せ衰へた顏を、暗い燈火の下に浮かして、血の氣のない唇をあんぐりと開いて、かすかな息を立てゝ居た。其の息が時々喉にからまつて、苦しさうに眉をしかめる。

と、穴のやうに落ち窪んだ眼をポカリと開いて、口のあたりをモガ〳〵と動かした。

何か言はうとするのが、口の内が乾いて言へぬらしい。お妙は氣を利かして、急須の口から微温湯を注いで遣ると、コクリと一口飲み込んで、ハッキリと姉弟の顔を眺めたが、

「二人とも未だ起きて居たのか――。」氣の毒さうに云つたが、其の眼には見る〳〵中に涙が湧いて、眼尻を傳つて、少し汚れた枕の上に落ちるのであつた。

「今、和田さんの夢を見とつた。――和田さんは何うしとるかな。」と、獨言のやうに云ふ。

「お父さん、和田さんは何故皆を捨てゝ行つて了つたの。」

「さうさな、――お父さんにも分らんわい。」

「こんな時に和田さんが居ると好いな。」

斯う云ふ言葉を傍で聞くお妙の身は愁かつた。――二人の間の呪はしい運命を知らねばこそ、時々には其の居なくなつたことを、薄情のやうにも取つて、恨みがましい老の愚痴を洩らすこともある。――新一の云つた理由を夢にも知らない身には、それ

も無理はない。

「お妙！」幸介は改まつた調子で呼びかけた。

「はい。」と、今まで背けて居た眼を眞面に、父の面を見下した。――視線はピタリと合つた。

幸介は苦しさうな息を吐いて、「お前にも苦勞をかけたのう。年頃の娘に何一つ樂しい思ひもさせず――こんな不甲斐ない父を持つたばかりに……」

「勿體ない――お父さんは何を仰言るのです。私、些つとも苦勞だなぞと思つては居りません。」

「いや〳〵、お前がさう云つてくれるので、私の心は猶ほ愁い。人並に物見遊山もしたからうし、又、好い着物も着たからうものを、それを何んの不平も言はず、毎日毎日扮裝も振りも構はずに働いて居るところを見るとな、可憐しうて私は身を切られるよりも愁いのだ。親の身になれば、我が子だもの、樂もさせたい、好い着物も着せたいのは胸一ぱいだ。けれども、何うすることも出來なかつたのだから、何うぞ勘忍し

てくれ。」

「お父さん――何うして今急にそんな事を仰言るの……これくらゐの事、何も當り前ぢやありませんか。」

幸介は暫く默つて、眞黑に煤けた暗い家根裏をまぢ〳〵と見て居たが、「私は、今度はとても駄目だと思ふがの……」と、靜に眼を閉ぢた。

「お父さん、そんな氣の弱いことを云つて何うするのです。心を強く持つて、養生をして早く癒つて貰はなければなりません。」とおろ〳〵聲で云ふ。

「私もな、癒るものなら今一度丈夫になつて、一花咲かせたいものだが……」と、疲せた頰に淋しい微笑を浮べた。

「だが、とても駄目だ。私にはよう分つとる。」

「……」言葉はなくて、吃逆泣きの聲が洩れた。

「それでの、私に萬一のことがあつたら、お前はこんな處に居たつて仕樣はない。何うかして和田さんの後を追つて行衞を尋ね當て、夫婦になつて共に此の少さい富也の

面倒を見て遣つてくれ。私は、其のことばかりが氣がゝりで、死んでも死に切れんわ。」

苦しい息を繼ぎ〳〵云つたが、急に咳き込んで來る烈しい空咳嗽に咳き入つた。顏は眞赤になつて、靜脈が怒張して、其の苦しがる有樣は、眼も當てられぬ。

お妙は驚いて、喉を濕してやるやら、背を擦るやら、手を盡していたはるのであつた。

斯うして一頻り苦しむと、又何時か其の苦しみも納まつて、生も根も拔け果てたやうな顏をして、只昏々として眠入る。

お妙は其の病苦に衰へた父の顏をつく〳〵と眺めて、親の慈悲、情け――を、身にしみ〴〵と感じて、涙は更に新しく湧き上るのであつた。

其二

「姉さん、之れからは毎日居る處がなくなつたの。」

「えゝ、居る處はなくてもね、姉さんと二人で居さへすれば、何うにかして富ちやん

を凍えさせるやうなことはないからね、安心しておいでよ。」

「あゝ、僕姉さんと一緒なら何所へでも行くの。――此處は七ッ岩だね。僕はね、此處を通る度に、何時かお父さんが飛び込んで死なうとした時のことを思ひ出して、悲しくなるの……けれど、今通つて了へば、最う之れからは通ることもないね。」と、立ち止まつて、深い谷を覗いて見るのであつた。

「富ちやん、危いよ。――最うね、そんな悲しいことは思はんようにおし。」

「あゝ、――だつて僕、何うしてもいろんな事が思はれるのだもの。」

「富ちやんはね、そんな事はすつかり忘れて勉強してね、大きくなつたら偉い人になつておくれよ。」

「あゝ。僕偉い人になつて、姉さんにもいろんな物を買つて上げるよ……。僕ね、お父さんにも樂をさせようと思つたのだけれども、お父さんは死んで了つたし……」と可愛い眼に涙含んだ。

お妙もホロリとしたが、「富ちやん、最うそんな悲しいことを云つて、姉さんを泣かしておくれでない。」

どんよりと低く薄曇つた空からは、かすかな冬の日の光りが地に落ちて、凍つた上に寒さうに顫へて、凛々たる山中の朝の寒氣は刺すやうに肌に迫つて、吐き出す息は直ぐさま霧のやうに白く凍つた。

お妙は富也を連れて、今、長年の間住み馴れた此の鹽原の地を捨てようとするのである。――目指すは花の都であるけれども、其所には頼る人もなければ、馴染の人もない。見も知らぬ他人ばかりの、未だ一度も土を踏んだことのない土地である。けれども、今のお妙の身としては、都にでも出て何んとか暮の道を立てるより外には、何うすることも出來ない、父の幸介が亡くなつてから、幼い富也を相手に三七日の間を山家の一軒家に暮したけれども、それとても自分の家と云ふではなく、家賃の滯りは責められる、僅かばかりの道具も父の葬式の費用やら、後の佛事の爲めに賣拂つて今は最う着のみ着の儘、身一つとなつて了つた。長く此の地に止まつて居て見たところで、何うすると云ふ今後の目的もない。――思ひ切つて都へ出て、身を立てる方法

を講じようと、家を疊んで、今朝早く出立した。

流石に長い馴染の土地である。いざ離れようとなれば、遣る瀬ないやうな殘り惜しさの心と、淋しさとが胸に迫つて、離れるに離れ難ない心地がする。山の姿も、溪川の流れの音も、木立も、土も、皆、思ひ出の多い深い馴染ではないか！　それを見捨てゝ見も知らぬ都の空へ行く――行つて何うなるか！　それも分らないけれども。女の身には心細く、悲しい。殘り惜しさと、今後の身の上の不安とにお妙の小さな胸は搔き亂れて、涙が自然に眼に浮ぶ。

「姉さん、東京へ行つたら、いろんな處が見られるの。」

「えゝ、見られるともね。」

「和田さんにも會へるの。」

「……」

「會へると好いな。」

「富ちやん！」

「あのね、――姉さんは年は大きくても女だから、僕どんなことをしても働くよ。――早く大きくなりたいな。」

お妙は、普通なら未だ惡戯盛りの此の幼い者が、貧と苦勞とに心を痛め〳〵て來たればこそ、いろ〳〵な心遣ひをして、こんな可憐しいことを云ふと思へば、可哀さうなやら、情けないやらで、思はずも富也の身體を犇と抱き緊めるのであつた。

「さあ、こんなことをしてると。今日中に那須野まで行けなくなるから、少し急ぎませうね。」と、涙を拭いて、日射しを仰いだ。曇つた空に、鈍い日光はどんよりと中空にあつた。

見送る人もない二人は、曲りくねつた山路傳ひに、トボ〳〵と山を降りて行く――其の的もない遠い旅へと出掛ける哀れな姉弟の後姿が、慄へるやうな冬の日の光りの中に物淋しく、悲しく見られた。

第九章

最う春も三月だと云ふのに、昨夜宵の口から降り初めた時候外れの雪は、朝になつて、未だ止まなかつた。それが、晝前頃から漸く雲斷れがして、恰かも處女の瞳のやうに澄み切つた空をチラ〳〵と覗かせたが、夕方になるとカラリと晴れた。常は煤煙と、塵埃とに濁り澱んだ都の空も、今日のみは雪にすつかり洗ひ落されて、宛ら、若き人妻が湯上りの淡い化粧を施したやうに、晴れ〴〵と清み渡つた。

三四寸も降り積つた雪は、空は晴れても凍て附くやうな寒さに溶けやうともせず、町々の家根々々、道、庭——總べて皆眞白い雪を被つて、見る限り白妙の色に彩られた。其所此所の公園に、雪見の杖を曳く風流を愛する人もチラホラ見掛けぬではなかつたが、多くは寒さに閉口して上野あたりにも人影は稀れであつた。

其所へ來かゝつたのは、雪見の人とは見えぬ男女の二人連れで——山下から廣い石段を上ると清水堂の方へと歩いて行くのであつた。男は二十八九の立派な青年紳士、山高帽に、鼻下の八字髭も似合つて、深い鼠色のインバネスの裾からは、切れるやうに折目の正しい仙臺平の袴が覗いて居た。

「オイ〳〵、何を思圖々々してるんだ。早く歩かないかよ。」と、樹の間を洩れる薄い日射しを斜めに仰いで、七八歩も遲れた女を促した。

「さう兄さんのやうにオイ〳〵と云つたつて、此の雪で早く歩けやしないわ。」と、下駄の齒に溜る雪塊を歩き難くさうに、それでも心持ち足を早めた。格子模樣のセルのコートを着て、首に卷いたボアーの色は、雪よりも白い白さであつた。

「それだから兄さんは、お前と一緒に歩くのは厭だと云ふのだ。——早くお出でよ。」

「兄さん、そんなに急かし立てたつて歩けやしないわ。今彼處で足が挫けて前鼻緒が斷れかゝつたんですもの。——兄さん、一寸見て頂戴な。」

「オヤ〳〵困つたな。どんなになつたんだへ。」と、少し引き返して見て、「斷れて了つてるぢやないか。これや一寸直りやせんよ。」

「直りやせんて——兄さん困るわ。どうかして直して下さいな。」と鼻聲になる。

「仕樣がないねえ。お前ぐらゐ兄さんに世話を燒かせる者はないよ。」と一寸輕く舌打したが、「お前何か結くものを持つてないか。」

「何もないんですもの。」

「困つたな。何かないか知ら。——之れぢや歩かりやしないよ。」と、眞に當惑したやうに眉を顰めて、四邊を見た。清水堂の前に掃除をして居る坊さんがあつた。

「兎に角、彼處まで我慢してお出で——頼んで何か貰はう。」と、自分だけさつさと先へ行つた。

「今、下駄の鼻緒を斷らして困つてるんですが、甚だ恐れ入りますけれども、何か藁屑でも好う御座いますが、見て下さいませんか。」

斯う呼びかけられて、坊さんはせつせと雪を掃いて居た箒の手を止めて振り返つた。立派な紳士の風采に頭を一つ下げて、

「それは嘸ぞお困りでせう。何か見て來て上げます。」と、氣輕く云つて、長い廊下を右に入つて行つた。

「文さん、お前の爲めに兄さんはこんな極りの惡い思ひをしなくちやあ成らんぢやないか。」

歩き難くさうに、それでも漸く其所まで辿り附いた女は、「だつて、私、何も故爲と斷つたんぢやないんですもの。」

「故爲と斷つても、斷らんでも、結果は同じで、皆兄さんの厄介ぢやないか。」

「それは兄さんですもの、妹のそれくらゐの世話は當り前ですわ。」

「オイ〳〵、散々人に厄介をかけて置いて、お禮どころか其の言ひ草は何んだい。——之れだから今の女學生上りは可かんと云ふのだ。」

「どうせ兄さんは、藝者のやうな卑しい稼業の者が好いのでせう。」

其所へ、先刻の坊さんは再び出て來た。

「此所に錢差がありますが、こんな物でも宜しう御座いますか。」

「どうも有難う。——之れで結構で御座います。どうも飛んだお手數をかけて濟みません。お蔭ですつかり直ります。」と、文子の下駄を脱がして鼻緒を穿げ乍ら、

「文さん、何んとか言はないか、兄さんに下駄の鼻緒まで直さして、平氣で默つてるなんて、實にお前にも困つたもんだ。世話が燒けて堪らんよ。」

「しかし何んですな、貴方がたは斯うして御夫婦で雪見をして、嘸ぞ御愉快で御座いませう。」と、坊主は口を挾んで、ニヤ〳〵笑ひながら二人の顔を眺めた。

「それ御覽、直ぐに斯う言はれるぢやないか。——いえ坊さん、夫婦ぢやないのですよ、之れは僕の妹なんです。」と、苦笑ひした。

「本當なのよ、——私妹だわ。夫婦ぢやなくてよ。」と、少しむつとしたやうな顏色をして、睨めるやうに坊主を見た。

「何もそんなにお隱しなさらなくても可いぢやありませんか。」

「困るなあ、文さん。お前が一緒に來るから可けないのだ。此の前だつてさうだよ、確か鹽原へ行つた時、宿屋の番頭が夫婦と間違へて、宿帳に記けられたことがあつたが、あの時はほんとに極りが惡かつた。」

「あら、私の方が餘つ程極りが惡かつたわ。あれは兄さんが惡いのよ。妹、妹と呼べば好いのに、文子々々つて呼ぶもんだから、それで變に思はれるんだわ。」

「そんな、お前のやうに理窟を言つたつて仕樣がない。兄さんが折角美人に見染められ

れても、お前と一緒に居ては女房と間違へて、諦められて了ふので、閉口だよ。」

「まあ、兄さんは直き女のことを云ふのね。——私、だから兄さんは嫌ひだつて云ふのよ。」

「オヤ〳〵、兄さんは嫌ひで、和田は好きなんだらう。まあ何うでも好い。どうもお前は僕の腰巾着だから仕樣がない。しかし、近い中に其の面倒もなくなるね。お前が和田令夫人となれば、私は厄のがれだ。さうなつたら兄さんは何所へ行くのにも一人だから、天下の美人は皆ベタ惚れだね。」

「まあ何んとでも仰言いよ。私、どうせ兄さんのお口には叶ひません。」

「ハ、、、、怒つたな。——今度は和田さんの腰巾着になるから、兄さんなんか何うでも好くなつたのだらう。」と、串談のやうに云つて笑つたが、急に眞面目な調子になつて

「和田と言へば何をしてるんだらうな。最う來さうなものだが。」

「ほんとに何うなすつたんでせう。車で先へ行つて了つたんぢやないでせうか。」

「そんな事があるもんか——。此所で待合はして常盤華壇へは一緒に行くと云ふ約束

になつて居るのだから、自分だけ先に行く筈はないさ。それにしても約束を違へるやうな男ぢやないのだが……」と金側の時計を出して眺めた。

「最う四時だ……。」と獨言つて、「坊さん、先刻方此所へ二十五六になる會社員風の男が來やしませんでしたか。」

「さあ何うですか……一寸分りませんな。」

と、坊主は箒の手を止めた。

「分らんとさ。」

「それぢや未だなのでせうから、最う少し待つて見ませうか。」

「うむ、待つことにしよう。約束したんだから屹度來るには違ひない。——だがねえ。」

「男の癖に意氣地がないのねえ。——之れくらゐのことに寒いなんて……」

「今日はお前と兄さんとは違ふさ。お前には和田さんに會へると云ふ樂みがあるもの、寒さも感じまいけれど、兄さんは謂はゞお供なんだから、一倍寒いよ。」

「まあ、厭な兄さん。」

「兎に角、最う少し待つて見ることにしよう。」と、うそ寒さうに其の邊をこつ〳〵歩いて、堂の彫物など眺め廻して居たが、偶と思ひ附いたやうに、

「さう〳〵……こんな處で云ふのも變だが、今日和田君に會ふ前に、お前と打合せをして置かねばならんことを、忙しいものだから遂ひ忘れとつた。」

「兄さん、何んの事です。」

「和田君との祝言だがね。——一體何日にしたら好いんだえ？」

文子はぽうつと顏を赤めて、「そんな事、こんな處で聞くものぢやないわ。」

「何所だつて好いぢやないか——。お前は何時にするのが都合が好いのか、其の事を今日和田君とも打合せしなくちやならんのだから、和田君に會ふ前に、此方の都合も決めとく方が好い。」

「分らないのねえ。兄さん、人が居るのに……」と、羞恥んで、坊さんの方に氣を兼ねた。

「さう云ふことは成る丈けお早い方が宜しう御座いませう。」と、坊主は横から言葉を入れて、羞恥む文子の顔を見て、ニタ〳〵笑つて居る。

「それ御覽、坊さんだつて早い方が好いつて云つてるぢやないか。」

「そんなこと知らないわ。」つんと拗ねて顔を背けた。白い頬がぽつと赤く染つて、屢瞬く瞼に睫の長いのが、一層の愛嬌を添へた。

「お前の都合で何うでも好いのだから、お前の心任せにする。けれども、和田君と僕とは同窓の友だらう。殊に今度はあゝやつて危かつた商會の財政整理をしてくれてお蔭で基礎も鞏固になつた。其の事に就ても何うかして相當の恩返しをしなくてはならないから、お前と早く祝言をして貰つて、親戚の間柄になつて財産の幾分を分けて恩に報いたいと云ふ考へなのだから、お前も其の意りで居てくれ。」

「そんな御都合もあるのですか——。私の都合は何日だつて構ひませんから、早くした方が好いわ。」

「ハ、、、、、矢張りお前も早い方が好いのだらう。——何んだ、顔を其方に向けた

りなどして、何も羞恥まなくつたつて好いさ。それでは和田君の方の都合次第で、成る可く取急ぐことにしよう。それにしても約束の時間を三十分過ぎたのに和田君は何うしたと云ふんだらう。ぢや、一足先きへ行つて華壇の方で待つことにしようか。」

「さう、それでも好いわね。」

二人は門を出ると、木の間を縫つて常盤華壇の方へと行くのであつた。

坊主は手を休めて其の後を見送つて居たが、「何んだ、二人でいちや〳〵したつておあ賽錢一つ上げるぢやなし、あゝ云ふところを見せられちや叶はん。」と、獨言を言ひ言、ひ廊下の方の掃除をしに入つて行つた。其の後はひつそりとして人氣もなく、弱々しい冬の西日は高い木の梢を掠めて、朱塗の堂の壁に顫へるやうに動いて居た。

其二

「富ちやん、此所には誰も居ないから、少し休まして貰ひませう。」

雄二郎と文子とが行つてから間も無く、慄へながら清水堂へ辿り着いたのは、お妙

と富也とであつた。二人とも乞食のやうなやつれ果てた姿で、此の寒空に破れ古びた袷を一枚着たのみで、疲れ衰へた身體を助け合つて、雪道をトボ〳〵と堂の石段まで來ると、立止まつて漸くほつと息吐いた。

富也は海老のやうに赤く凍えた手に息を吹きかけながら、「姉さん、寒いねえ。」と、身體は慄へて居る。

「富ちやん昨夜些つとも眠らないから、それで今日は餘計寒いのよ。」

「姉さん、今夜も眠るところがないの。」

「何所へでも寢かして上げたいのだけれど、姉さん最うお錢が些つとも無くなつて了つたの。——富ちやん、嘸ぞお腹が空いたでせうねえ。」

「うゝん。僕は男だから御飯を食べなくたつて好いよ。——今朝から何も食べないけれども、何んともないの。」

「富ちやんにさう言はれると、姉さんは身を切られるよりも愁い——。姉さんが意氣地がないばかりに、少さいお前にこんな苦勞をさして……、勘忍して頂戴ね。」

「姉さん、お腹が空いたでせう。」

「いゝえ、姉さんは些つともお腹が空かないの。だけど、富ちやんは空いたでせうね。」

「僕、お腹は空かない。」

其の言葉を可憐しいと云ふやうに、情けの籠つた瞳に、富也の顏を眤と見詰めて、

「まあ強いことね。——ぢや少し休まして貰ひませう。」

寒さと、饑と、疲勞とに戰く姉と弟とは、犇と身體を抱合つて、高緣の小陰へ蹲つたのである。

其所へ先刻の坊さんは再び出て來た。偶と二人の姿を見附けて、暫く眺めて居たが乞食とでも思つたものか、慳貪な聲を尖らして、

「これ〳〵、そんなところに寢ちや可けないぜ。お賽錢でも盗むのぢやないか。」

其の邪慳な言葉に、お妙は情けないと云ふやうな眼付きをして、「決してそんな者ではありません。餘り寒さが強いものですから此のお堂を拜借したのですが、どうぞ暫

くの間休まして下さいまし。」

「お前達・乞食ぢやないのだね。」

「……」お妙は怨めしいやら、口惜しいやら、言葉もなくて、眼からは涙がホロホロと溢れ落ちた。

「あゝ、乞食ぢやないのか。」と、言葉を柔らげて、「それは誰の困るのも同じだから、暫く休んだら行きなさいよ。」と、奥の方へ行つた。

富也は物に恐れるやうな、オド／＼した眼色をして、其の後を見送つた。「姉さん、此所に居ちや可けないの。」

「姉さんも、富ちやんも、最う何所にも居るところが無くなつたのだわねえ。」

「斯う云ふ時に和田さんが居ると好いのだがなあ。」

お妙はそれを言はれると、遣る瀬ないと云ふやうに胸を抑へて、「富ちやん、どうぞ和田さんのことだけは言はないでおくれ。」

「だつて姉さんは和田さんと夫婦になるのだつて、皆がさう言つて居ましたよ。それ

だのに和田さんは、姉さんを置いて何所かへ行つて了つたんですもの。僕、今度和田さんに會つたら怒つてやるの。」

「富ちやん。それにはね、富ちやんなどには分らない、いろ／＼な深い譯があるのだからね、決して和田さんを恨むのぢやありませんよ。」

「あゝ。——姉さん、寒いねえ。」

「寒いでせう。——こんな寒さに薄い物一枚しか着て居ないのだもの。姉さんが抱こして上げるから、此方へお出で……直きに暖かになるからね。」と、お妙は富也の身體を我が胸に、犇と抱き緊めたのである。

「姉さんの身體も冷たいねえ。」

「少し我慢してお出で、直ぐに暖かくなるからねえ。」

「姉さん、寒くても死なゝいの。」

「えゝ、大丈夫だよ。」

「僕……」と、言ひ淀んで「あのね……お腹が空いて堪らない。」

「富ちやん、お腹が空いて死ぬのなら、姉さんと一緒に死にませうねえ。」
「姉さんと一緒なら、僕、死んだつて好いよ。」
「姉さんと一緒なら死んでおくれかえ――。そんなに迄で姉さんのことを思つてくれるの。有難う……。」
お妙は自から昂ぶる感情を抑へ兼ねて、思はず力を籠めて富也の身體を屹と抱き緊めて、自分の頬を弟の頬に押し附けた。――涙はハラ〳〵と其の顔に降り注ぐのであつた。
「富ちやん、苦しい！」
突然帛を裂くやうな叫び聲を上げて、お妙は其所に突つ伏して身を悶へるのであつた。富也は驚いて姉を見た。顔色は蒼白に、唇の色も紫に變つて、乳の下をしつかと抑へて、キリ〳〵と齒を嚙んだ。
「あゝ姉さん死ぬの、死んぢや厭だよ、〳〵。」と、富也は姉に取り縋つた。眼は屹と吊り上つて、額際には冷たい膏汗がしつとりと浮いた。

「姉さん！」富也は何んの成す術もなく、只泣くばりであつた。
「大丈夫だつてば、それや先の出やうさ。――お前さんの出やう次第で、鬼にも蛇にもなれば、神にも、佛にも……だよ。あゝ酔つた、女將。」
酔うた足元のしどけなく、雪道を右に左に危つかしく搖れながら、縺れる舌に酒の元氣で大聲に話し乍ら、其所へ通りかゝつたのは、一目にそれと分る女將らしいのと藝者と半玉の三人連れであつた。
「ねえ女將、鬼にも蛇にもなれば、神にも佛にも……」と云ひかけて、トロリとした酔眼に偶とお妙と富也とを認めて、「おや、人間が落つこちてるよ。而も大小二つで落つこちてるよ。」
「何を云つてるんだね、串談ぢやないよ。すつかり酔つぱらつちやつてさ。」と、之れも十二分の酔の千鳥足で――其のふら附く足を止めて二人を見た。
「あら、本當だねえ。まあ此の寒さに何うしたと云ふんさ。」と、剃り立ての青い眉を

纍めて、二人の方へ寄つて行つた。

お妙は胸を緊め上げて差し込んで來る痛みに、口を利くどころではない。富也は泣吃逆をしい〳〵、

「姉さんのお腹が痛いの。御飯も何も食べないものだから……。」

「まあ生きた人間が御飯を食べないつて……それでお腹が痛むの。——ぢや癪が起きたんだね。」と、女將。

「何んだえ、癪だつて——意氣な病氣を患つてるぢやないか。逢ひたい見たいが嵩じて癪の種なんざあ、乙りきだねえ。」

ふつと酒の息を吐いて、足に絡む褄捌きもしどけなく、傍へ寄つて來た。

「暢氣なことを云つてる場合ぢやない、何んとかして遣らなくつちや可哀さうだよ。——御覽よ、二人とも袷一枚で慄へてるぢやないか。」

「小母さん、姉さんが死んだら何うしよう。」と、富也は泣く。

未だ十二三の半玉らしいのは、其の丸い邪氣ない可愛い顏に、半ば恐れるやうな、

半ば哀れむやうな表情を見せて、

「可哀さうだわねえ。何うかして上げなさいよ。」

「米ちやん、何かお藥はないかへ。」

「藥ならあるよ。」と、米ちやんと呼ばれた藝者は、コートの脇明から手を入れて、帶の間を探つて、縮珍の紙入を取り出して、藥を女將に渡した。

「何んだね、之れは江戸櫻ぢやないか。——頭痛膏が癪に利く奴があるかよ。」

「だつて外にないのだもの、困つたねえ。」

と嘆息して、「だん子ちやん、お前持つてない？」

「私、生憎よ。清心丹も何も忘れたんだもの。」

「何うかしましたか。」

表の方が餘り騷々しいので、何事かと出て來たのは、先刻の坊主であつた。

「オイ〳〵坊さん、お前さんとこのお堂で病人が出來たんぢやないか、何んとかして遣らないかへ。——ねえお女將、私も通り合せたものだから、一つ大いに義俠心とか

云ふものを出して、助けて遣りたいねえ。」と酒の香を吐いて、コートを脱いだが、「一層思ひ切つて之れを遣つちまへ。」

「あら姐さん、それは借物ぢやなくて。」

「何だえ、人中で借物なんて見つともない。大きな聲をお仕でないよ。」と、嗜めた。

「それにしても困つたねえ。」とお女將は考へたが、「あゝ私すつかり忘れて居た、藥を持つてたのに……」と、袂を探つて、アルミニユーム製の小さい器を出した。

そして屹と齒を喰ひ縛つて苦痛を忍んで居るお妙の口に無理に含まして、綺麗な雪を掬つて注ぎ入れた。

「坊さん、お前さんもぼんやり立つて見てないで、何か温かい物でも持つて來ておやりよ。」

斯う女將に言はれると、坊主は慌てゝ内に入つて行つた。

三人は何か呟き合つて、やがて女將は金を集めて富也の手に握らした。

「まあ、何んて冷たい手だこと——全で氷のやうだよ。——之れでね、お藥を買つて

姉さんに上げなさい。そして、何か温かい物を二人でお食べよ。」

お妙は、藥の利目か、漸く痛みの収まりかけた胸を抑へて、面を上げた。

「いろ〳〵お世話樣になりました上に、こんなに澤山のお錢まで頂きまして、何んともお禮の申し樣もありません。」と、斷れ〴〵に細い聲で云つて、ほつと息を吐いた。

「いゝえ、ほんの少しなの。——それよりか差込みは收まりさうかね。」と女將。

「お蔭樣で大きに宜しう御座います。——ほんとにこんなに澤山頂きまして、有難う存じます。」

「何んだね改まつてお禮など……只、私たちの心持ち丈けさ。」と藝者。

「有難う存じます。」

「お互ひ樣さね。——又ね用があつたら數寄屋町へ來て、米吉姐さんと言へば誰も知つてるからね、お出でなさいよ。」

「何から何まで行き屆いた御親切で、有難う存じます。」

「ぢや大事にね。」

と、慰めの言葉を殘して三人は、公園下の方へと降りて行つた。幾分か醉も醒めたと見えて、歩調も先刻よりはしつかりして居た。

お妙は其の後姿を見送つて、今更ながら人の情けと云ふものを、しみ〴〵と感じて涙含まれたのである。

「富ちやん、お錢をこんなにどつさり頂いて——何か溫いものを買つて上げませうね。此所に居ると又叱られるから、寒いけれど何所か凌ぐところを探しませう。最う姉さんのお腹の痛むのも癒りましたよ。」

「癒つたの——僕、何うしようかと思つた。」

「心配させたわねえ。」と立上つたが、眼がぐら〳〵として、又其所へベッタリと坐つて了つた。

「あゝ、何うしたと云ふのだらう。」と、儚なさうに云つて、又、立とうとするのであつた。

「未だ癒らないの。」

先刻の坊さんは盆の上に湯呑を載せて出て來たが、四邊を見廻して獨言のやうに、

「おや、今の人達は、何所かへ行つて了つたかな？」

「只今直ぐ參りますから、何うか御免下さい。」

「何あに、構やしないから緩くり休んでお出で。——今、お粥を拵へて上げようと思つたが、間に合はないから葛湯を持つて來た。これをお飲み。」と、先刻とは態度がすつかり變つて、優しく云つた。

「あの……頂きましても、宜しう御座いませうか。」

「あゝ、好いとも〳〵。」

「有難う存じます。——子供がお腹を空かして居りますから、頂かして貰ひます。」

「お前さんもお飲みなさい。お腹が溫まるからね。」と、懷中から懷爐を出して、「懷爐が大變溫まつて居るから、之れをお前さんに上げよう、懷中へ入れて置くと好い。」

「有難う御座います。」と、感謝の涙は思はずもホロリと其の頰に傳つて、冷たい雪の上に落ちた。

其三

「一寸お尋ね申しますが……。」

スックリと身に合つたオバア、コートの背がすらりとして、鼠色の中折帽を被つた二十五六の青年紳士は、斯う云つて坊さんを呼び止めた。

「はい、何んですかな。」

「今此所へ二十七八の紳士と、十七八の令嬢と二人連れで來はしませんでしたか。」

「男や女は、年が年中來て居るから、分りませんな。」

「さうでせう。——けれども今此所で待合せる約束をして來たのですから、確かに此所に來る筈に違ひないんですが……。」

「貴方がたは此所を待合所と心得てるから、何うも困る。」と、無愛相に言ひ捨てゝ、さつさと行つて了つた。

青年紳士は僅かに苦笑したが、「確かに最う來て居さうなものだが……それとも遲かつたものだから、先へ行つたのか知ら……」と獨言つて、うそ〳〵と其の邊を伺ふのであつた。

「あゝ、和田さん！」

富也は目敏く其の姿を見附けて、駈け寄つた。

思はぬところで自分の名を呼ばれたので、新一は吃驚して其方に眼を遣つた。其所に居るのは意外にも、やつれ果てた姿の、お妙と富也の姉弟ではないか！　あの秋の一夜を泣いて別れてから、六月の間夢の間も忘れることの出來なかつた、其のお妙ではないか！「あゝ富ちやん、妙さん！　何うしてこんなところに居るんです。」と、我と我が眼を信じられぬやうに、二人の姿を屹と見入つた。

お妙は、夢にも、現にも忘れる間とてはなく、戀ひ焦れた懷しい新一が眼の前に立つた姿を見て、直ぐにも飛び附きたいやうな思ひに胸は躍つた。けれども流石に以前と比べては見違へるばかり立派になつた男の姿に比べて、乞食にも等しい見すぼらしい自分の身を恥ぢて、小さくなつて俯向いて居た。

「和田さん、何うして姉さんや僕を置いて、何所かへ行つて了つたの。」幼い者には姉のやうな分別はなかつた。傍へ寄つて怨ずるやうに云つて、新一の顔を仰いだ。

「おゝ富ちやん！」と、新一の聲も慄へた。

「可哀さうに何も知らないお前にまで、兄弟の巻添へで人一倍の苦勞をさすんだねえ。」

「和田さん、最う何所へも行つては可けませんよ。姉さんはね、毎日々々和田さんのことを云つて、泣いてばかり居るんですもの——。姉さん、和田さんに怒つて上げなさいよ。」

「富ちやん、和田さんは先と今とは御身分が變つたと云ふことが分りませんか。」と、お妙は頑是ない弟の言葉を、新一に對して氣の毒と、つゝましく嗜めた。

「姉さん、身分つて何あに、姉さんと和田さんとは夫婦になるんですね。夫婦つてふものはそんなに離れたり何んかするものぢやなくて、同じ家に居て一緒に仲好く御飯を食べたり何んかするものだつて、僕、何時かさう聞きましたよ。」

「富ちやん、勘忍しておくれ、和田さんは最う昔の和田さんぢやないのだよ。」

「貴方の御樣子を拜見しまして、それはよく分りました。」

漸う〳〵之れだけ云つて、お妙は咽び入つた。人目がなくば、義理と云ふ苦しい鎖で縛られた身でなくば、飛び附いて其の胸に縋つて、思ふさま泣いて〳〵泣き盡したい戀しい其の人を眼の前に置いて、何うすることも出來ない身が煩燥しい。さう云ふ運命が呪はしい。——只、胸が一ぱいになつて、先立つものは涙であつた。

思ひは新一も同じことであつた。けれども世の中の重い義と孝との爲めには、自分の心は殺しても其の苦痛を忍ばねばならぬ。愁ひに優しい言葉をかけて、お互ひに後の苦痛を深くするのが道ではない。燃え立つやうな心を抑へて、強ひて外々しく、

「お父さんは何うしました。」

「お父さんはね、和田さんが居なくなつてから直ぐ惡くなつて、去年の冬死んで了つたの。病氣や、お葬式でね何も無くなつて了つたものだから、鹽原にも居られなくなつてね、姉さんと二人で那須の方だの、大宮の方だの、いろんな處を廻つて來たんで

す。けれどもお金が些つともないものだから、泊ることが出來ないの。――それに姉さんは女だし、僕は子供だしするものだから、皆が馬鹿にして、乞食だ〳〵と云つて笑つたり何んかするの。僕は口惜しいけれども、喧嘩をすれば負けるもんだから默つて居るけれども、斯う云ふ時に和田さんか兄さんか居たら、こんな目には逢はないのだと思ふと、悲しくつて〳〵、姉さんと一緒に大宮のお神樂堂の中で、一晩泣いたこともあるの。今日も最う昨日から御飯も何も食べないものだから、先刻姉さんが病氣になつて了つたので、僕、今何うしようかと思つて居たのです。」

新一は暗然として富也の言葉を聞いて居た。其の一語々々は、胸に針を刺されるよりも苦しかつた。

「あゝ、運命と云ふものは何故さう慘酷なものでせう。」吐くやうに云つた新一の眼からは、潸々として熱い涙が落ちた。

「そして、二人は之れから何所へ行くのです？」

「はい、只今貴方にお目にかゝつてお立派な姿を拜見しまして、最う何も思ひ殘すこ

とはありません。――私、富ちやんと二人で田舍へ歸ります。」

「田舍へ歸る。――妙さん、どうぞ私を恨んで下さるな。此の世ばかりが世界ぢやない。未來もあれば、天國もある。二人は其の先の世を樂んで居ませう。――あゝ、慾ひに此何で逢はなかつた方が好かつた。」

「其のお言葉が何よりで御座います。」と、袂を屹と嚙みしめて咽び入つた。

やがて思ひ切つて、「では、私、お別れいたします。」と、名殘り惜しさうに新一の面を見た。涙に濡れた頰には、こぼれた鬢の後れ毛が、べつたりと張り附いて居た。

「妙さん、一寸お待ち。――其の姿では嘸ぞ不自由でせう。」と、紙入から紙幣を出して、「之れで富ちやんに温かい物でも食べさしたり、綿の入つた着物でも着せて上げて下さい。」

「斯う云ふ物を頂きまして、猶更思ひの種で御座います。それぢやお別れ申します。何うぞお身體をお大事に……さあ、富ちやん、行きませう。」

「姉さん、行つちや厭です。――和田さん、僕は歸りません。何うぞ一緒に連れて行

つて下さい。和田さんに捨てられると、姉さんも、僕も又人に苛められたり、乞食だと言はれたり、お神樂堂に寢たりせねばなりません。僕は男だから好いけれども、姉さんは…姉さんは女だから…」と咽び入つて暫くは口が利けなかつたが、漸う漸うに、「女だから、僕愁いの…。和田さん、僕は行きません。何も食べなくつても好いから、一緒に居て下さい。」と吃逆泣く。

新一もお妙も聲を呑んで居た。

「富ちやん、そんなこと言はないで、姉さんと一緒に歸つて下さい。」

「いやだ〳〵。和田さんは、僕も姉さんも可哀さうだとは思はないんですか。」

「富ちやん、お前そんな分らないことを云ふのなら姉さんは、富ちやんは置いて一人で行きますよ。」

「姉さん、一人で行つちや厭だ。」

「ぢや姉さんの云ふことを聞いて、さ、一緒に歸りませう。」と、後に心を殘す弟の手を取つて、しほ〳〵と行く。

「あゝ富ちやん。」

新一は富也の懷中に先刻の紙幣を入れた。そして、振り返つたお妙と顏を見合せたが、心强くもつと踵を廻すと、すた〳〵と去つた。――先刻から餘り遲い新一の迎へに引返した雄二郎が、松の樹蔭から此の場の樣子を伺つて居たのには少しも氣附かないで、常盤華壇の方へと行く。

第十章

雄二郎の經營して居る米津商會は貿易商としては有數の方で、東京に本店を置いて横濱、神戸、其の他海外にも支店があつて、隨分手廣く營業して居た。それが、雄二郎が未だ年の若いところから、惡辣な人物を信用して重く用ひた結果、商會の財政はひどく紊亂を來して、危くも既に取附けにまで逢はうとするやうな危機に臨んだ。其の責任を一身に負うた商會主の雄二郎は、從來の取引先との間の德義上、又、信用上若し商會の運命が其の成行きの結果になるやうなことになると、全く切腹しても申譯

の立たんことに立到るので、其の心痛も一通りではなかつた。處が、其の時折好くも鹽原を去つて飄然として都門に入つて來た和田新一が、一身を其の渦中に投じて整理に着手した。そして、流石に實業社會に少壯の敏腕家として許された雄二郎に何しても方法の立たなかつた紊れに紊れた商會の財政も、彼が沈着なる決斷と、切れるが如き敏腕とに瞬く間に整理されて、さしもに危かつた運命も恢復し、今では以前に優る信望の下に、手廣く事業の手を張つて、營業は益々盛大になるばかりである。それで此の二月から鎌倉の地を選んで新築に取りかゝつた別莊も、今では略々落成したので雄二郎は土曜日を幸ひ明日の日曜をかけて、妹の文子と共に別莊の方へ來たのであつた。

別莊は、濱から、海まで一畔の下に集めることの出來る高臺の位地に在つた。文子は別莊に着いて着物を着代へると直ぐ、未だ新築したばかりなので木香のプンと高く匂ふ緣側に立つて、別に何を見ると云ふ的てもなく、唯惚とりとして眼の前に廣々と開けた海邊の爽かな風光に見入つて居た。

四月中旬の長閑な午後の日はボカ〳〵と照つて、そよとの風もない靜かな海面は、さながら磨き上げた一錬の鏡のやうに穩かに、其の紺青の水の彼方に、茅ケ崎、大磯の濱々は墨繪のやうに煙つて見えた。そして、直ぐ眼の下に廣げられた砂濱には、恰かも銀の炎のやうな陽炎が、チラ〳〵、チラ〳〵と眩しく燃え走つて、渚に寄せては返す男波女波は、さながら睦しい男女の笑ひさゞめくやうな聲を立てゝ居た。其の長閑さと、穩かさ……殊に今日は土曜のことゝて、東京から入り込んだ汐干の客に、濱にも、海にも人の姿が溢れるやう。白い手拭や、赤い帶や、大きな海水帽が、チラチラと忙しく眼に入つた。

けれども文子の心は、眼に映るさう云ふ現象には奪はれなかつた。胸にはさま〴〵な希望が湧いて、身内を廻る處女の血汐が自づと溫まつて來ると、顏がぽつと熱つて自然と息も喘んで來る。そして眼の底には、眉の濃い、鼻の高い、凛々しい新一の姿がまざ〳〵と浮いて來て、我にもあらず解れるやうに溢れて來る微笑は、和つと唇のあたりに浮んだが、込み上げて來る何んとも知れぬ嬉しさに、身體中がむづ〳〵して

攀つたくて堪らないと云ふやうに、乳のあたりをしつかと抱へるやうにして、傍の籐椅子に凭れて、汽車の中で買つて來た新聞に眼を洒して居る雄二郎に向つて突然、

「兄さん！」と、叫ぶやうに呼びかけたが、急に聲を立てゝ笑つた。

雄二郎は新聞から眼を離して、「何んだ——。一人でそんなに笑つて、何がそんなに可笑しいんだ。」

「何も可笑しくはないわ。」と、未だ笑ひながらそれには深く答へようともしないで、

「海へ行きませう。——濱は、ほんとに賑よ。」

邪氣なく甘へるやうに云つて、兄の返事も待たずに蝶のやうに輕く身を飜すと、最う空氣草履を穿いて、直ぐ其所から濱に續く庭木戸のところに立つて、和つこりと此方を振り返つた。

常にない妹の乾燥いだ樣子に、雄二郎は呆氣に取られて、

「まあ、何うしたと云ふのだらう。」と獨言つて、衝立つて居た。

「何でも好いから早く入らつしやいてば！」と、木戸を開けるとヒラリと躍るやうに

外へ出た。——紫紺の派手な矢絽の姿は、春の日光に輝き渡つた廣い砂濱の中に、パッと目覺めるやうに浮いて見えた。

雄二郎は帽子を被つてステッキを小脇に抱くと、庭下駄を突つ掛けて、文子の後を追うた。

「お前、今日は餘つ程何うかしてるね。」

漸う〳〵追ひ附いた雄二郎は、息を喘ませて文子の肩越しに覗くやうにして云つた。

「何うもしてやしないわ。」と、振り返つて和つこり笑つて見せて、「濱はこんなに賑かなんですもの——遂ひ出て見たくなつたのよ。」

「隨分賑かだね。今日は土曜日だもんだから、汐干に東京から來てるんだよ。」

二人は肩を並べて、傾斜になつた砂濱を、渚へと下りて行くのであつた。

「一寸お尋ねしますが、材木座の方へ行くには、何う行つたら宜ろしう御座いませう。」

斯う不意に横合から聲を掛けたのは、托鉢行脚の旅僧であつた。

「はい、之れを眞直ぐに行らつしやれば、材木座ですよ。」と、文子は其の白い細い指を指して敎へたが、偶と何事にか驚いたと云ふやうな感情をして、旅僧の顏をつく〴〵と眺めた。

「有難う御座います。何うも失禮しました。」と、すた〳〵と行く。

文子は其の後姿を見て、何か深く考へ詰めるやうな眼付をして首を傾けたが、思ひ切つて二三歩進んだ。

「あゝ、若し一寸……。」

「私ですか。」

「貴方はあの何時ぞや、宇都宮在で私をお助け下さつた方ではありませんか。」

「いや、私はそんな者ではありません。」

「いゝえ、命をお助け下すつた恩人ですもの、私、何んで忘れるものですか。」

「屹度人違ひでせう、私には決してそんな覺えはありません。」

「兄さん、此の方よ。」

「文さん、確かだね。」

「えゝ、確かですとも！」

雄二郎は其の言葉を聞くと、旅僧に向つて慇懃に會釋した。

「私は文子の兄で米津雄二郎と申す者で御座いますが、昨年の夏妹が宇都宮在で惡漢に誘拐され、既に命まで危いところをお助け下さつた方が御座いますので、何うか其の人に廻り合つて御禮を申し上げたいと、最う毎日のやうに云つて居ります次第で……若し、人違ひで御座いませんでしたら、決して御迷惑を掛けませんから、私ども兄妹の望みを叶へてお名乘り下さるやうに願ひたいのです。」

旅の僧は暫く躊躇つて居たが、やがて心を定めて、

「それなら申しますが、全く妹御さんの仰せの通り、私でした。――實は通りかゝりに偶と見ると或る家から煙が出て居るものですから、若し火事であつたら消し止めようと飛び込みましたら、丁度煙の中に此の方が氣絶して居られたので、一寸手當てをしたゝけなのですから、御禮のお言葉では却つて痛み入ります。」